

俳句雜誌

令和四年一月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十五卷第一号

水 明

2022 1月号



信 風 節 季



新年おめでとう

ございます

本年もどうぞよろしく

令和四年新春

主宰 山本鬼之介

水 明

第1096号

— 華の一句 —

金閣寺 晩秋の景水にあり

矢作水尾

京都北山にある鹿苑寺の別称である金閣寺は、室町幕府三代将軍・足利義満の開基。舍利殿の内外に金箔が貼られているのが別称の由来。昭和25年、学僧の放火により消失、同30年に再建。平成6年、ユネスコ世界遺産に登録。池泉回遊式庭園の中心をなす鏡湖池には、金閣をはじめ四季折々の景観が映り込む。今まさに晩秋の景水にありである。

(鬼之介・推薦)

水明

令和 4 年
1 月 号

季節風信

華の一句

逃げ げる (作品)

道 程 (近詠)

玻璃戸越し (近詠)

俳句における鑑賞について

冠 木 門 箱 主宰作品の鑑賞

硯 箱 季音月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

現代俳句鑑賞

『水明誌』を繙く

山本鬼之介

小倉倭子

柚木治子

神野紗希

境 延昭

井口俊晴

由良ゆら女
網野月を
吉住光弥
ほか

丸山マスマ
高島寛治
鳥羽和風
ほか

正木萬蝶
佐々木典子
近藤徹平
ほか

網野月を

竹内宗一郎



水明集

反町 修
笹本 啓子

横山 君夫
ほか

水明集作品評

水琴窟 (水明集十一月号鑑賞)

山本鬼之介
池田雅夫

山紫集

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

俳誌望見

句集喝采

梅澤佐江
近藤徹平

菊風句会

水明例会報・各地句会報

新春俳句大会・水明忌のお知らせ

春の吟行会のお知らせ

風声・発展基金御礼

新珠賞作品募集

水明運営組織

年間行事

水明例会および各地句・教室

後記

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

逃げる

山本鬼之介

築地塀落葉に肩を貸すごとく

師走名画座「寄らば斬るぞ」の名台詞

日本の髪の三つ編み冬の朝

煤 逃 や かつ て 愛 國 婦 人 会

グ ラ ビ ア の 女 優 に 恋 し 古 曆

雪 明 り 「 山 と 川 」 て ふ 合 言 葉

葛 湯 吹 く 少 女 よ 愛 し 盛 り かな

シ リ ウ ス や 夢 を 捨 て ざ る 朧 船

道程

小倉倭子

赤レンガの駅より旅の初紅葉
気ままなるリズムを踏んで草黄葉
行く先はこの道ひとすぢ竹の春
肉眼では見えぬ心眼秋深し
修飾の言の葉消して菊活ける
往年の詩心燃ゆる秋夕焼
万感や遙か白富士拝す朝

青天に魚引く力風上がる

小倉和子

「いい句が出たネ！新年初句会に
気持イイネ！」俳句を初めて間も無
い年の北千住カルチャー教室で星野
紗一主宰から連発のお誉めの言葉を
いただき、茫然自失の私だった。
当時、大先輩のリーダー長谷川久
枝先生も御自身の事の如く感激して
下さった。三十三年間学んできた現
在、私の生涯句になる一句である。
振り返れば、恨み度くなる程厳しく
指導を下された山本紫黄師は俳
句の神様。

玻璃戸越し

柚木治子

仄見ゆる御舟の「炎舞」身に入むる
冬晴や翼ほしがる裸婦の像
吹寄せに見ゆる落葉の神の池
背で聴く即興曲の木の葉雨
枯木星隠すもの無き線描画
冬の灯や玻璃戸越しなる美術館
「名樹散椿」デフォルメの枝や金屏風

季語の蛾を調べている時である。その歳時記には解説と御舟の火蛾の絵が載っており、なぜか俳句より炎の虜になる。
あれから何十年、赤い糸に誘われてかの絵に出合う機会を得る。仄暗い展示室で迎えてくれた「炎舞」は、期待に反して意外に小品で驚愕はした。身を焦がして闇の中へ昇天する蛾の輝きなど写実を突き抜けた仕上りであり、「名樹散椿」は、デフォルメされた枝の生命力が抜群で、それぞれの気を授かったのであった。

俳句における鑑賞について

現代俳句協会副幹事長

神野紗希

(水明塾二〇二一・一〇・二九講演より)

1 俳句における二つの「よむ」

俳句には、作る「詠む」と、鑑賞する「読む」、ふたつの「よむ」があります。今日は後者の「読む」＝鑑賞について整理しながら、俳句とはどういう詩かを考えてみます。

私が俳句をはじめたきっかけは俳句甲子園でしたが、この大会では鑑賞する「読む」が重要視されています。通常の俳句大会ですと、参加者は「詠む」だけで「読む」のは選者です。しかし俳句甲子園は、5人1チームで剣道の試合のように句合わせをし、互いの作品についてイベントを交わします。選手は、俳句の「作り手」でありながら「読み手」つまり鑑賞する立場にもなる双方向的な場なんです。これは句会も同じです。作者として投句をし、読者の側にまわって俳句を読み、評を述べます。句会は、ひとりの人が作者と読者をくると行き来する、スリリングな空間です。

俳句甲子園の高校生は、具体的な表現に着目して対話を進めます。季語はこれでよいのか、しらべやフリイン、言葉

のイメージなど、俳句の上に現れる具体的な表現を証拠に挙げ、その妥当性や引き出す世界について語り合います。作品の表現に即して語る。これが、俳句の鑑賞の基本です。

ホップ なんかい

ステップ この表現がいい

ジャンプ この表現が〇〇なのでいい

「いいな」「ちょっと違うかも？」という直感が何より大切です。そして、その感覚を相手に伝わる形で表現するには、理由を述べねばなりません。まずは、どんなところがいいと思ったのか、表現の上から探ります。さらになぜその表現をよいと思ったのか、具体的に語ってみる。そうすると、AがBだからいい、という客観性を含んだ批評ができます。とはいえ、論理ばかりが先に立っても、心のこもらない批評に感じる力と語る力、感受性と論理性の双方が重要です。

2 「読み」が一句を方向づける

ではどう読めば、その句をよりよく読めるのか。

岸本尚毅さんの「十七音の可能性」(NHK出版 平成28年4月)では、加藤楸邨の(死ねば野分生きてゐしかば争へり)の読み方について次のように考察しています。

「戦後の世相を詠んだ句です。もつと普遍的に、死ぬも修羅、生きるも修羅というような世界観を詠んだ句と解してもよい。死者の無念を託する器として「野分」を用いたと考えれば、思想が主、季語が従です。これが人間探求派的な読み方です。じつさいに野分が吹いている、その野分の凄まじさを表現するために「死ねば野分」と言ったと考えれば、季語が主、思想が従です。これが季題至上主義的な読み方です。

季語が主か従かは、句を読むときに句のどこに重点を置くかによって違います。そのいずれであつても、人間存在の暗さを詠ったこの句の迫力に変わりはありません。

ここで岸本さんは、人間探求派的な読みとホトトギスの読み、二つの読みを提示しています。作者の加藤楸邨は、石田波郷・中村草田男と並んで「人間探求派」と括られた作家です。俳句を通じて人間を探求することが創作の目的であるという信念のもとに、特に楸邨は戦後の時代や人間の業に向き合ってきました。楸邨という作家の背景に従えば、前者の「野分」が思想に援用されたと考えるのが妥当です。しかし、これまで人間探求派的な文脈で読まれてきたこの一句も、ホトトギスの価値観で評価することも可能だ、と岸本さんは読んでみせました。どちらの読みがよりこの句を輝かせるかは、読み手の判断にかかっています。つまり、「読み」によ

って、その句の方向性は定義づけられるのです。

では、どのように読めばよいか。まずは広く文学研究における「読み方」について、子規の絶筆(糸瓜咲て痰のつまりし仏かな)を例に挙げ、実践的に紹介してみます。

1 テクスト(≡文学作品そのもの。作品論)

2 作者の情報(伝記的批評。作家論)

3 時代背景(カルチュラルスタディーズ)

4 間テクスト性(他の文学作品との関わり)

一つめは、文学作品そのものを分析し読み解いてゆく、作品論的な読み方です。テクストとは、編まれた言葉の集まり、文学作品そのもののこと。この読み方で糸瓜の句に対すると、糸瓜の花の黄色が痰の黄色を思わせ生々しいことや、仏は死者を意味し「つまりし」も過去形であることから、この世を去った死者の姿に飄々とした糸瓜を取り合わせることで、やや俳諧味を濃く書き取った句という解釈になります。

次に作者の情報を加味して読む、作家論的読み方です。子規は長く結核・脊椎カリエスを患い、この句を読んだ十数時間後にこの世を去りました。子規の人生を踏まえれば、この「仏」はまさに子規自身であり、子規は自らの死、未来の己の姿をも客観視しえた壮絶な句になります。

三つめは、時代背景、当時の文化を援用した読み方です。糸瓜水は当時、痰切りの薬として重宝されており、子規の庭にも糸瓜棚が作られていました。糸瓜水という薬が間に合わず、まさに(痰一斗糸瓜の水も間に合はず)で亡くなつてし

まった……。『糸瓜』の選ばれた意味がくつきりします。

最後は「間テクスト性」、他の俳句や文学作品との関係を検討して読み解く方法です。たとえば、子規と親友だった夏目漱石の〈長けれど何の糸瓜とさがりけり〉。子規の生前に詠まれた句ですが、子規がこの世を去ったあと「吾輩は猫である」がヒットして小説家になった漱石は、過去を振り返ってこの句を子規に捧げたいと書いています。ぶらぶらした糸瓜の無為の存在感を詠んだ漱石の句と合わせると、子規の句もどこかたくましく飄々とした味わいを感じます。

また、子規は〈西行に糸瓜の歌はなかりけり〉とも詠んでいます。名歌人・西行にだって、日常卑俗の糸瓜を詠んだ歌はないだろう。だから私は俳人として糸瓜を詠んでやる……そんな矜持が死の間際に糸瓜を詠ませたのかもしれない。ひとつの作品を読み解くにも、いくつもの方法があります。その数多の方法の中から作品が一番喜ぶ読み方を選び取る作業も、「読み」の大切な作業です。ある作品のよりよい読者でありたいという気持ちだが、鑑賞を深めてゆきます。

3 近代俳句における「読み方」

では、より俳句に特化して「読み方」を深めてみましょう。今日は三つの読み方を実践してみます。写生系、抒情系、新興俳句系。近代の俳句史の中で新しく生まれた表現です。具体的な名句を挙げ、どういう着眼点で読み解けば魅力的に輝くか、「感覚」「感情」「記号」の角度から見てみます。

まずは写生系の読みです。写生とは、正岡子規が近代の俳句革新において提唱した概念です。子規は絵が好きだったので、画家の友人にインスパイアされ、西洋の絵画の概念である「写生」、いわゆるデッサンという方法を、新しい日本語の使い方に応用しようと考えました。子規は、言葉の意味を面白く扱う同時代の俳句を、頭で考えた陳腐なものだと退けます。頭の中の知識で作るのではなく、眼前に出会った風景や出来事を、デッサンをするように書き写す。それは視覚を中心に、中心にした、「感覚」を重視する作り方です。子規の俳句革新は「知識」から「感覚」へのパラダイムシフトでした。

言葉の意味を追うのではなく、絵や写真を見るように「感覚で読む」と、写生系の俳句の面白さが伝わります。

夏嵐 机上の白紙飛び尽す 正岡子規

アニメのワンシーンのように映像的です。飛び尽した白紙の眩しさが、夏という季節の輝きを視覚的に伝えます。

川を見るバナナの皮は手より落ち 高浜虚子

この句も、なぜバナナの皮が手から落ちたのかを考えてもたいした答えは見つかりません。川べりでバナナを食べ、ぽろぽろと川を見つめているときの解脫感。手からぬるとバナナの皮が滑り落ちる感触が、生きている時間には、こういう無為の無意識の瞬間もあるよなあとと思ひ出させます。

短日やかすかに光る皿の蝦蛄 芥川龍之介

これも、皿の蝦蛄の微かな光が、冬の短日の頃の光の具合を目に見える形で可視化してくれます。

夏草に汽罐車の車輪来て止る 山口誓子

これは動画のカメラワークをイメージしましょう。誓子は当時の先進的なカルチャーだった映画に影響を受けています。「夏草に」で画面を低く設定し、固定カメラに機関車の車輪がぐわつと現れ、じんわりと勢いを殺して止まります。迫力たっぷりの映像。機関車の車輪の存在感を、たった十七音で再現してみせた、それだけで作品として成立しています。

続いて、抒情系の読み、感情を読むタイプの俳句です。

明治時代に正岡子規が「写生」を提唱したことにより、現実重視・感覚的な俳句が増えてきました。子規の弟子である高浜虚子は、写生をさらに推し進めて「客観写生」と呼び、客観的であることを強調しました。そうした流れに異議を唱えたのが水原秋櫻子です。虚子の「ホトトギス」に所属していた秋櫻子は、昭和六年、「自然の真と文藝上の真」という論を発表して「ホトトギス」を去ります。この論は、客観写生のゆきすぎを批判し、俳句における主観の重要性を語ったものでした。主観とは、作者の意志です。作った人の主観的な表現が文学にはありうべきだ、と考えたのです。主観を重視する作風の場合には、感情を読み解くことが可能です。

馬酔木咲く金堂の扉にわが触れぬ 水原秋櫻子

当時、秋櫻子が作っていた句です。「わが」の一語が入ってくるのが特異です。馬酔木の花が鈴なりに咲くそばに、金堂の美しき歴史ある扉がある、それに今、ほかならぬ私が触れて中に入ろうとしている……。そのゆたかな高揚感が、流

麗な言葉のしらべに乗って伝わってきます。

こうした新興俳句の流れからやや遅れて、先ほどご説明した人間探求派の存在感も出てきます。

墓 長子 家 去る 由もなし 中村草田男

初蝶や 我が三十の袖袂 石田波郷

いずれも「墓」や「初蝶」といった季語が、「長子」である我や「三十」歳になった私の心理を象徴しています。

咳の子のなぞなぞあそびきりもなや 中村汀女

もう一つ、感情で読み解く近代の俳句として、当時の女性の立場から家事や育児を詠んだ作も挙げられます。日々の生活の中にあるさまざまな心の機微。風邪をひいて咳をしている子が、退屈なのと心細いのとで、大人になぞなぞ遊びを強いてくる。「きりもなや」の一言に嘆きが見えます。こうした句は時を超え、読者の心と共鳴する力をもちます。

もう一つは、新興俳句系の読みです。戦後の前衛俳句の系譜にも繋がります。秋櫻子が文学における主観を重視した流れの上に、若い俳人たちが中心となつて、現代詩などに影響を受けた象徴的な俳句が試みられます。彼らの句には、写生的ような現実には即した俳句とは一線を画した、イメージの世界が広がっています。たとえば、写生派の「蝶」であれば現実の眼前の「蝶」と結びつきますが、新興俳句系の「蝶」はイメージを喚起する記号として働きます。

蝶 墜ちて大音響の結氷期 富澤赤黄男

新興俳句の詩的な達成を導いた旗手の代表作です。蝶が落

ちても普通はひらりと無音に近いはずですが、静かな水の時空の中では、その死が大音響となつて響きました。この「蝶」は私たちの知っている現実の蝶というよりも、小さく美しく儂い命の象徴としての「蝶」と捉えたほうが、異質なイメージ世界を飲みこめそうです。このように「蝶」という言葉から意味を抽出する、「記号」を読む方法があります。赤黄男は「蝶はまさに（蝶）であるが、（その蝶）ではない。」という言葉を残しています。具体的な現実に還元する必要のない、詩の言葉の純粹性を思います。

頭の中で白い夏野となつてゐる 高屋窓秋

夏野といえば緑や青を思いますが、それが白。言葉の衝撃が、まぶしい光で埋め尽くされた記憶の夏野を思わせませす。

戦争が廊下の奥に立つてゐた 渡邊白泉

昭和十四年、太平洋戦争前夜に詠まれた句です。「戦争」という概念を实体をもつ存在のように描くことで、生活の内側にも迫ってくる存在の恐怖を写し取りました。

中年や遠くみのれる夜の桃 西東三鬼

この「桃」も、秋のみのりの果物としてだけではなく、エロスの象徴として「中年」という段階を定義しています。

4 いい俳句って、何？

さて、俳句の表現史に即して、「感覚」「感情」「記号」といった角度から俳句を読む方法を見ましたが、ではどういふ俳句がいい俳句なのか。「いい俳句って、何？」どう俳

句を読むか、選ぶか。私の考えを三つ、最後にお話してみます。

一つめは、季語のイメージを塗り替えているか。

古池や蛙飛びこむ水の音 松尾芭蕉
うつくしや障子の穴の天の川 小林一茶
柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺 正岡子規

一句目、かつて蛙は鳴く声を詠むものだとされてきたのを、芭蕉は水に飛び込ませました。「音」に着地させることで、詠まれてきた声との対比も効いています。一茶の句も、雄大な印象の天の川をちっぽけな障子の穴から覗いてみました。そのことでもかえって生活の底から覗く天の川の本質的な美しさが捉えられています。子規の代表句も「柿」のイメージを塗り替えるものでした。子規は随筆「くだもの」で「柿などというものは従来詩人にも歌よみにも見離されておるもので、殊に奈良に柿を配合するというような事は思いもよらなかつた事である。余はこの新たらしい配合を見つけ出して非常に嬉しかった。」と述べています。歴史のある古都・奈良に、卑俗な柿を取り合わせたことで、柿が堂々とした日本の秋のイメージとなりました。このように、詠み継がれてきた季語のイメージに新たな一ページを加えることができたなら、その世界には現実の手触りが戻り、新鮮な印象が生まれます。

二つめは、言葉の技術が生きているか。「うまい」か。

をりとりてはらりとおもきすすきかな 飯田蛇笏
ひらひらと月光降りぬ貝割菜 川端茅舎

牡丹百二百三百門一つ 阿波野青歌
爛々と虎の眼に降る落葉 富澤赤黄男

蛇笏の句はひらがな表記にしたことで、すすきのしなやかな姿が十全に感じられます。茅舎の句も月光の降り方を「ひらひら」というオノマトペで示したのが特異です。青畝の句も数字を増やしていつて最後に一つに絞る、大胆で簡潔な構成に唸ります。赤黄男の句は一見普通ですが、「に」が面白い。「爛々と」は「虎の眼」ではなく「落葉」にかかっています。虎の眼の光と呼応して、落葉もいきいきと輝きます。

最後に挙げたいのは、一回性を宿しているか。一回性とは、二度とは訪れない、ある瞬間ということ。この「瞬間」ということには、季語の存在も大きく関わっています。

俳句にとって季語は特別な存在ですが、私はその理由を、反復性と一回性を兼ね備えた言葉だからだと考えています。春は毎年訪れますが、今年の春は二度とありません。桜は毎年咲きますが、今眼前に咲く桜は一度きりのものです。繰り返される季節の中で出会う、今年のこの桜。季語はどれも、この一回性と反復性を兼ね備えています。

繰り返される大きな時間の流れと、その中の一瞬間とを同時に句に引き込むことができるのが、季語の効力です。季語は永遠と瞬間を内包し、普遍性と個別性を立ち上げます。

しかし、季節は毎年繰り返されますから、季語はそれ単体では反復性が強いものです。だからこそ季語を詠む際には、一回性を意識する必要があります。来年も見られると思う桜

と、来年は見られないかもしれないと思って見る桜の光は、きつと違うはず。今がまさに一期一会の瞬間であり、見逃してはならないとハッと心をつかむような、そんな命の躍動を引き出せたとしたら、その句は一回性を得て、命そのものとなって生きつづけることになるのでしょうか。

しんしんと寒さがたのし歩みゆく 星野立子

人間が爆発しそうな出勤電車であらとくら 栗林一石路

大花火何と言つてもこの世佳し 桂 信子

おおかみに螢がひとつ付いていた 金子兜太

立子の句では「歩みゆく」という私の積極的な行動が、今の瞬間、一回性を引き出しています。一石路の句も「ちらと」の一語が転換となって、繰り返される劣悪な日常の中に、一抹の救いの光としての桜を輝かせます。信子の句は最晩年の作。花火も打ちあがっては消える儚いものです。その一回きりの光に、一度きりのこの世を大らかに肯定しました。最後の兜太の句も、偶然の螢と狼の邂逅を切り取ったことで、一回きりの命の輝きが永遠に十七音に閉じ込められました。今、偶然とも思える命の一回性を、十七音の上に生かすこと。これが、俳句の本質ではないかと考えています。

今日提示した「読み」はあくまで一例です。百人いれば百通りの読み方がある。それが俳句の自由です。感じたことを大切に、自由に読んでください。その読みが過去の俳句たちを新たに呼び覚ます力にもなり、現在の俳句を発見する原動力にもなります。私もそう信じて読み続けます。

冠木門

● 主宰作品の鑑賞

境延昭

十月号

つまべにや肌身離さず守り札

「つまべに」は鳳仙花の傍題。夏から秋にかけて咲く紅色の花の汁を搾って爪を染めた。今時の黒や銀色のマニキュアと違って、その薄紅色が少女の恥じらいの色の様に愛おしい。上五の切れが深い。お守りは可憐な少女からもらったもの。「学業成就」或いは「武運長久」とあつたに違いない。幼く実らなかった恋の物語りを読む。

悶絶と気絶のちがひ 醉芙蓉

「悶絶」をめぐって幾つかの辞書に頼つたが、「気絶」との違いが釈然としない。「悶える」には「恋に悶える」の用例、岩波語感の辞典には田山花袋の「布団」の小説が引かれるが今一つ納得いかぬ。世俗の艶本にあるエロの極致を考えてしまふ。季語の醉芙蓉がその鍵である。それが真実陶酔なのか苦痛なのかは知らない。

秋扇ひらき「下天の内」を謡ひけり

織田信長は桶狭間の戦いの出陣を前に、幸若舞「敦盛」を

謡い舞つたと伝えられる。幸若舞は鼓、笛又は扇拍子に合せて語り、簡単な所作が加わる。わが故郷柳川に近く、福岡県瀬高町に幸若舞保存会があり口伝傳承されている。

ドラマなどでは人間五十年で始まる一節が本能寺で四十八年の生涯を閉じた信長自身を象徴する様に演出される。この月のタイトルはこの句に由るもの。「下天の内」にくらぶれば夢幻の如くなり、と続く。下天とは天界の下層で、そこでの一昼夜が人間界の五十年に当るとされる。「敦盛」のこの一節は人の世の儚さを詠んだものである。

追はれゆくポルシエの女星流る

ポルシエは赤が似合う。車高が低く、ヘッド廻りとお尻の曲線が何とも優美である。アクセルを踏めば腹にひびく低いエンジン音で路面に吸い付くようなダツシユが素晴らしい。カーキチならずとも垂涎的である。ジェームス・ボンドが活躍の映画「007」の女スパイでも詠むような句である。

担任は八尾小町よ 秋夕焼

富山県八尾町、九月初めの三日間は風の盆で膨れ上がる。深めの菅笠で踊り子はみな美人に見える。作者は若狭に疎開

の経験を持つ。そこでの学校、八尾出身の美人の先生が居られたのだから。早熟ぶりがうかがえる。

十一月号

一の糸替ふる仕種のさやけしよ

一の糸は三味線や琴などの第一弦、最も太く低音を出す。句意から察するに三味線。本調子や二上り、三下がりなど全て第一弦を基本に二の糸、三の糸を整える。その糸を替える場面を知らない。言わば舞台裏、余程親密な二人に違いない。しつとりとした景の設定である。カラオケセットが進出以来、三味の音や流しなど風雅な趣が歓楽街から無くなったのは残念である。

所轄署の刑事の杞憂秋の声

コロナで在宅の時間が増え、刑事ドラマと馴染みになった。「所轄」はそこで特有の表現。単にテリトリーの筈が上下の蔑みが付き纏う。殺人など担当の「捜査一課」は県が違えば「刑事一課」。捜査をするのが刑事、ネーミングとは言え硬い役所のダジャレの様に思える。所轄刑事の杞憂を「秋の声」で詠む作者の冷めた目がある。

アラジンのランプ夜長の燈とならず

タイトルの「千夜一夜」はこの句に因る。インド・ペルシ

アの説話に起源する元はアラビア語の物語。十八世紀初頭フランスの東洋学者ガランが翻訳したもの。アラジンのランプは少年が地中から掘り出し、そのランプの精と魔法使によって出世する話である。魔法のランプが燈を灯すことはない。二十一世紀になって句材にされるとはアラジンもさざびつくりであろう。

夕霧にしつぱり濡るる一つ紋

一つ紋は背中の真ん中に紋が一つだけの紋付。その両脇に加えたのが三つ紋、さらに両胸に付ければ五つ紋で最上級の礼式とされる。一つ紋であっても礼服である。それなりのお役目の人に違いない。夕霧に濡れるのは分かるが問題は中七紛れなく男女の逢瀬と読む。今の世、和服は着ても紋付を持つ人は滅多にいない。頭に鬘があった頃の場面の様である。

大紋の違鷹羽雁渡る

前句に続き「紋」が句材、全面的に広辞苑を頼りに読む。「違鷹羽」は鷹の羽を斜めに交差させた紋所、「大紋」は大きな紋の他に五か所に紋を付けた絹や麻布の直垂とある。直垂は家紋の他下賜された主君の紋所も用いられたという。下には長袴を着用し、相当の格式を持つ人のそれなりの場面を想像する。鉤状や竿状に形を整えて飛来する雁、幾千の距離を飛来するには隊を統率する一羽が居る筈である。大仰で晴れがましい場面設定の中に、多くの誌友同人を束ねる水明主宰の心意気と読む。

硯箱

◆季音十一月

井口俊晴

秋風やチエロ背負ふ娘の長き脚

山中みどり

バスツアーの定番コースにもなっている。信州・安曇野の蕎麦の花、ああ旅行に行きたいなあ。

チエロを背に、駅の階段を昇って行く女の子を見たことがある。中学生くらいか、体が小さいため、チエロケースが足首に届きそうで、はらはらしたのを覚えている。この句の娘さんはすらすらと背が高く、チエロのせいで長い脚が引き立って見えたらしい。秋風が吹いた夕方、なぜかチエロの音色に癒されたくなり、久し振りにCDを持ち出した。薄幸の天才女流チエリストと言われたデュ・プレが弾くブラームスのチエロソナタは、美しくも哀切であった。

アルプスの山を遥かにそばの花

波多野寿子

晴天に恵まれた秋の一日。遠くアルプスの山並みを背景に、真っ白なそばの花が、まるで絨毯のように、一面に咲き誇っている。それは日本人の原風景ではないだろうか。コロナ禍のため、旅行に行きたくても我慢した人が多かったと思うが、

社背に間道を行く鴉日和

星野和葉

靈験あらたかだと伝えられる神社を訪ねた後、せっかくだから近くを探訪することにした。ちよつと歩くと、お社を背負った里山の森を突っ切るように、細い間道が通っているの、ちよつと歩いてみることにした。振り向くと、さっきまでいたお社がひっそりと鎮まっている。その時、澄んだ大気を震わせるように鴉の鳴き声が聞こえた。寂しいような、身が引き締まるような、そんな秋の午後であった。

野一面時を違へず彼岸花

原田想子

真っ赤な彼岸花が野原一面を埋め尽くしている。「時を違へず」と詠まれているように、咲く時は一斉、まるで魔法を見るようである。だから、九月を過ぎる頃ともなると、あち

こちらにある大小の公園で、彼岸花を見る催しが開かれる。しかし、残念なことに埼玉・幸手市にある権現堂公園の「曼珠沙華まつり」は、去年に続き今年も中止となった。「コロナウイルス感染症拡大防止の観点から」と市の観光協会では言っている。

秋めくや半音高き時の鐘

高島寛治

ちょっと動くとき汗をかくのだが、朝晩はそれなりに涼しくなってきた。久し振りに歩く小江戸の街は、住民よりも観光客の姿が多いようだ。名物の焼芋や子供に人気の駄菓子を売る横丁の店、それぞれに賑わいを見せている。そろそろ太陽が傾きかけようとする午後三時、時の鐘が鳴った。澄んだ大気のせいなのか、鐘の音は普段聞くより、半音高く響いたような気がしたものである。

マンシヨンのほびまの祠曼珠沙華

近藤徹平

曼珠沙華は彼岸花の別称で、なんと一六〇三年に日本イェズ会が刊行した「日葡辞書」にその名が記載されている。お彼岸の頃になると、ちょっとしたスペースさえあれば、毎年鮮やかな花を咲かせてくれる。お馴染みの田圃の畔や川の土手だけでなく、住宅街でもそれは変わらない。そう、この

句の舞台は、マンシヨンとマンシヨンが接する狭い土地に残るお稲荷さんだ。たぶんマンシヨンが建つずっと以前からあった小さな祠なのだろう。曼珠沙華の真っ赤な花……。そうだ、狐が出てくるかもしれないな。

虫の声車のライトそつとつけ

葛城千世子

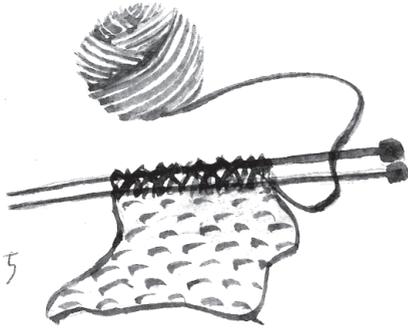
夜遅くクルマで帰って来た。ガレージにクルマを入れてエンジン切る。しばらくすると、静かだった後ろの庭から虫の声が聞こえてきた。コロコロコロとかリンリンリンと鳴いている。それが運転席に座っている私に夜の闇の深さと、深い静寂を感じさせる。シートに体をあずけたまま、今度はそおととライトを点けてみた。明るく照らされた正面の道に人影はない。

縫糸に母よみがへる秋裕

野平美紗子

着物が好きな私だけれど、汗をかくといけないので、夏の間は薄手のワンピースで過ごしている。それでも、そろそろ衣替えをしても良い頃だろうと、箆笥の奥から秋裕を引っ張り出し、畳紙の上に広げた。そつと裏地に触れてみると、着物譲ってくれた母が縫った糸が指にさわる。二人して着物談義をした懐かしい日々……。

季音雪



中之島 由良 ゆら女

天を突く黄葉明りを通りやんせ
電飾の骨白じらと冬鴉
待ち人の靴音さがす冬館
シャンデリアゆらくパドドウ文化の日
重文の威容くまなく冬茜

裸身仏 吉住光弥

庫より汽笛始発電車の朝寒へ
背に腹や亡妻まの蒲団を叩き干す
空中に影斬り結ぶ木の葉雨
親ゆづりの冬帽被り親の顔
大根や磨きみがかれ裸身仏

深 づ め 網 野 月 を

冬 う ら ら 石 山 かつ子

深 爪 を 後 悔 し て る 冬 隣
いくつになつても綿飴が好き酉の市
失くさないように買はない手袋も
杜父魚の口開け目開け死んでをり
左手を庇ひつつ引く深谷葱

朝 市 の 婆 の 訛 や 膝 毛 布
寂聴尼の人生破格冬うらら
やつちや場の常も破声冬ざるる
枯葉舞ひ鳥屋の孔雀が昂りぬ
掛大根日を追ふ毎に陽の色に

水 の 奔 り 石 井 喜 恵

下 駄 の 音 大 橋 廸 代

組 板 の 水 の 奔 り や 朝 寒 し
朝寒しかちりと外すドアチェーン
露の戸や芯に届かぬ曲り釘
夜を来て苦屋にほどく露の髪
セーターのほつれ余白の多き文

黄 葉 降 る 百 の 黄 袈 裟 の 下 駄 の 音
撫づるべし銀杏黄葉の垂乳根を
庄屋の柿へ鬨の声あぐ群鴉
カンツォーネと焼肉しむる秋の芝
鳩尾に諫言の悔い木守柿

冬 帽 子 大村節代

助六の水入りの水冬の水
水俣にいまだ闇あり花八手
冬帽子その場しのぎの法螺を吹く
故郷へひよつこり顔出す冬帽子
朝市に親子揃ひの冬帽子

こころ根 小倉倭子

珈琲に抹茶カステラ文化の日
主役より脇役達者菊人形
眼を病みて心根を詠む神無月
詩を凝らす破調もよけれ枯葉舞ふ
窓に枯葉シャンソンを聴く喫茶店

霜の朝 栢尾さく子

生も死も永遠の秘めごと星流る
流星も火球も見ずの早寝かな
菊の酒他人の栄誉に乾杯を
磔刑の太釘隠す紅葉山
享年は今日かも知れず霜の朝

冬 隣 菊池ひろこ

冬隣黒子の頭巾透けにくし
冬隣窓映り合ふ西洋館
憶えなき小道の蛇行片時雨
光管棒うごく時雨の交通規制
人心を得がたき降嫁冬椿

冬されば 五明 昇

月の兎 椎野 美代子

野猪盛ん籠城沙汰の峡の村
朝寒に揉み手忙しき青物屋
五臓六腑を主治医に預け温め酒
神の留守今に富山の薬売り
すは夜盗風奔る 日本橋

露天湯の月や胎児のさまに揺る
月光を集めて力力石
蛇紋石の蛇が這ひ出づ月今宵
先生と弟子と兎は月ん中
一人占めしてゐるつもり朝月夜

耳飾り 境 延 昭

紅葉 島津 初花

秋うらら鳴りそで鳴らぬ耳飾り
染付の徳利に屋号かまどうま
火の国の山が火を吐く神の留守
一課二課課長杜宅の干蒲団
神の留守女医に眼の底覗かるる

冬ぬくし握手に心通はせて
隼人瓜数多生らせて主留守
小春日や寺の跡地の樅古木
巡りきて紅葉一枚ダム御膳
水源の細りし湖底秋深む

遠富士 鈴木康世

黄葉 十倉和子

遠富士を掌に載せて見る秋の暮
看護師の言葉簡潔雁渡し
薬手帳の記録を増やし九月尽
野草を子ら駈けめぐり草は実
弱音吐く己厭ふや夜半の秋

黄葉して明るき湖畔去りがたく
黄葉散る瓦斯灯のこる煉瓦道
黄葉の樹々の名知らず鹿煎餅
黄葉晴墨痕掠れて力あり
ハミングはワルツたんぽぽ返り咲く

黄葉鶏 田寺玲子

秋の蝶 永野史代

石路咲くや潮の香つつむ移情閣
鳥声に木霊のあそぶ黄葉谿
枯葉踏む磴七百の奥の院
歌神へ黄葉落葉の磴のぼる
城濠の水きらめかせ鴨むるる

もう逢はぬことに決め霧深し
余力あらば故郷の墓へ秋の蝶
秋の蝶渾身の黄をひらひらと
石路の黄よ庭のひかりの焦点よ
首伸ばし何待つ遠流の鳥の石路

十一月 西山 貴美子

暈目 星野和葉

霜月や嬬座に在れば母を恋ふ
蜜月のごとき一步を冬の草
冬日向虚けと住めば虚けめく
「あんたがた何処さ」肥後の岨路に落葉降る
花八つ手闇にぼつりと半濁音

暈目を這ふ日の脚や冬に入る
鉢植ゑの右往左往す冬初め
初冬や庭師連れ来る女弟子
膝笑ふ長き石段冬紅葉
鐘楼の黙深くして冬紅葉

冬の薔薇 波多野 寿子

だ い こ 茂木和子

溪流はキラキラと行き紅葉散る
胸中のわづかなゆらぎ凧吹く
もう逢へぬ人を恋ふれば落葉舞ふ
灯を消せばぼんやりと浮く冬障子
紅点しひそかに咲ける冬の薔薇

人間になりたい大根見得を切る
小虫の往来大根の葉はジャンゲル
ゆさゆさと尻振つて抜く大根かな
背負はれし大根の葉の燥ぎやう
色白の己惚れ大根料りけり

秋 刀 魚 矢 作 水 尾

秋刀魚焼く終の住処を燻らせて
廃校の有刺鉄線もずの贅
秋高し棟木に響く一の槌
金閣寺晩秋の景水にあり
石路の花一隅にある齡かな

黄 落 期 山 中 みどり

銀盆に生牡蠣宴のプロローグ
磯かをる牡蠣やアフリカの泡の酒
凡庸なスピーチ黄金色の牡蠣フライ
黄落や不意に逢ひたき人のあり
黄落や一日ひとひ一日の愛ほしいく

残り火一つ 柚木治子

胸中に残り火一つ冬紅葉
冬紅葉名妓の気品ある一樹
散り残る赤き一片冬紅葉
老ゆまじと姿勢くづさぬ冬薔薇
木枯や女よろける昼の月

句集『マネキン』 山本鬼之介著

山本鬼之介主宰の初句集が、間もなく上梓される予定です。

この句集は八百四十句という龐大な句を収めた句集だそうです。

尚、水明会員には、全員に寄贈して頂けるといふ事です。皆様どうぞ楽しみに、お待ちください。

季音月

冬隣

丸山 マスミ

ちちろ鳴く吾が耳鳴りは鈴の音
 そそり立つ奇岩石門紅葉狩
 道ならぬ恋の神話や夜長の灯
 法堂の燭の揺らめき冬隣
 迷路めく京の路地裏姫椿

里の冬

鳥羽 和風

本尊の螺髪をたたく煤払
 綿虫や未熟児は今優良児
 冬草や白の過ぎたる山羊の乳
 雪吊に安堵と記す日記かな
 寒鯉の微動だにせぬ孤独かな

神の旅

高島 寛治

朝寒を攪拌したる登校児
 朝寒し夜勤帰りの我が子待つ
 冬紅葉雨情生家に津浪跡
 狍犬の立ちて見送る神の旅
 方丈に旧りし扁額冬紅葉

逝く秋

森本 早苗

行く秋や白いテラスの弾き語り
 盆景に溪の声聴く菊日和
 子午線の町の弥栄菊花展
 黄葉やメタセコイアの金の雨
 草の風尾花一叢踊り出す

蜜りんご

渡辺 舎人

いち枚の音降らしめ寒の剪定師
 透き重ね葉蘭に冬の濃き日影
 鴨己が思案の胸に深睡る
 水鳥の水脈のまつすぐ識らず引く
 ゆふづつの芯まで沁みて蜜りんご

風

荒井 俱子

自己流の健康体操秋うらら
もう次の風がまとひぬ花芒
落鮎や尖り初めたる峡の風
新刊の帯紙外す文化の日
凧に鈴の緒踊る鎮守様

花八つ手

宇田 白鷺

暮れ泥む果てなき空へ鷗猛る
秋晴や帰路は伊吹の裾走り
秋鯖や若狭なれずし活気づく
母の背も丸くなりけり花八つ手
ばつさりと庭師切りたる花八つ手

檜の雨

池田 雅夫

山影の塊まりゆける日短
山城を攻むる北風檜の雨
冬の夜の外灯震へどほしかな
底冷や身を固くする石仏
どこまでが空やら冬の霞やら

冬紅葉

大場 順子

草の実のだれかれなしに人が好き
里山の返す筈や猪撃たる
日溜りに終の華やぎ冬紅葉
黒門に残る弾痕冬紅葉
舳斗雲に乗つて一気に神の旅

霧の道

森川 義子

子とつなぐ手は離すまじ霧の道
初霜や百基の墓の光り合ふ
玉垣に銀杏黄葉の夕映ゆる
晩秋やゆるゆる上る畑けむり
枯葉舞ふ四辻の風の尖りけり

初紅葉

松宮 保人

嬉しくも寂しくもあり刈田原
缶コーヒーことんと落とす秋時雨
山道の平らとなりてけらつつき
浜寺へ迫る景色や初紅葉
青天や棘を恨みて柚子を挽ぐ

綴れ刺せ 藤澤喜久

野 仏を祀る路傍や草の花
今年米「ひとめぼれ」とや届きけり
つづれさせ「綴れ刺せ」とは心急く
テールライト続く踏切初時雨
枇杷咲いて「日日是好日」と思ふかな

小夜時雨 梅澤佐江

目もあやな花嫁御寮小春の日
俳縁に感謝の一日桃青忌
芭蕉忌や出番待ちたる旅靴
枯葉踏むたびに枯葉の声を聴く
したためし文また破り小夜時雨

勤労感謝の日 井上燈女

みな息災に老いて勤労感謝の日
夫の忌に合はせ白菜漬けおかな
返り花句碑に咲かんと粧ふ紅
川筋を白く引き締め百合鷗
山茶花の散り敷きわれを迎へたり

狭庭景 井関礼子

生涯は永し短し枯葉舞ふ
紋様の人為及ばぬ枯葉かな
水引草狭庭の茂み抜きん出て
石路の花いつしか狭庭住処とし
白芙蓉手付かずにある狭庭かな

冬銀河 山田美佐尾

冬晴や遠き山脈^{やまなみ}ホームより
牧場の馬は孕みて冬うらら
聞耳を立つる三毛猫枯葉降る
新聞を配るバイクに冬銀河
小雨降る夜やしのぼる芭蕉の忌

月蝕 松井由紀子

埋火のごと闇にあり蝕の月
蝕終へて素肌うつくし冬の月
鬼柚子のひとつ離れて無人店
鬼柚子やなんとしやうぞ径五寸
鬼柚子の無頼顔なり厨うち

秋 薔 薇

内 田 恵 子

鏡の中の見知らぬ私朝寒し
女子会のパスタのランチ秋薔薇
やさしさは勇氣に通じ秋の薔薇
人住まぬ村に猪鬣歩せり
紅葉狩山猫拝の文を待ち

屋上庭園

町 野 広 子

中央区銀座屋上庭園紅葉酒
紅葉狩ひそと現はる修道院
花々を訪ね秋の蝶小さし
朝の露パン工房の老職人
霧動き車体揺らしてバス来る

冬 隣

井 口 俊 晴

ジャケットの前搔き合はせ冬隣
凧やピザ売るワゴン駅の前
凧やジャングルジムを吹き抜けり
小春日の猫まるくなるボンネット
大根の艶かしくも道の駅

高 所 恐 怖

霜 中 冬 至

てまひまをいとはず作る柚味噌かな
タバコ止めて又吸ふタバコ秋の晴
秋風に蜘蛛の知恵知る流し糸
煤払ひマスクの上にもたマスク
煤払ひ高所恐怖は親ゆづり

冬 桜

野 口 和 子

空仰ぐコナラ黄葉幹太く
溢れ咲く若木の精気冬桜
誕生日会犬は七歳星月夜
行く秋や銀座空也の最中来る
闇行けばライトアップの冬桜

冬 の 海

上 戸 千 津 子

冬の海灯台の灯の纏れがち
追ふ風に行く宛もなく枯葉舞ふ
柴垣に華やぎ添ふる散紅葉
行く秋や来年の事予約なし
小春日や猫は「く」の字でジャズを聞く

神の留守 川崎道子

神の留守磴の半ばで休む駕籠
奥宮の人形に釘神の留守
庭仕事小春のひと日使ひきる
銀杏黄葉金貨の袋運びだす
銀杏黄葉帰路には重き旅靴

草の実 岡野順子

へばりつく草の実いくつ親子かな
実をつけてどこまで撓む穂草かな
実をつけて手をつなぎ合ふ草の実よ
草の実の精一杯の主張かな
草の実の数多路上の駐車場

七五三 西浦千枝子

羽織袴で怪獣ごっこの七五三
発火しさうな生家の庭のななかまど
よく咲きぬ風のある日の秋ざくら
微笑みし露座仏化粧ふ照紅葉
夫の忌に友より届く富有柿

冬入日 松山清子

秋刀魚焼きひとりの夕餉ジャズ流れ
父と子のキャッチボールや小春風
稜線のくつきり耀ふ冬入日
一隅に日差し集めて石路の花
凧やサツシの窓のひゆうと鳴る

季音(雪・月・花)の投句について

季音の投句用紙を今月から巻末につけました。今月からは、この投句用紙を用いて投句をして下さい。

※雪・月・花欄のご自分の該当欄を赤ペンで囲む事

※楷書で書く事

※万年筆またはボールペンで書く事

(鉛筆は不可)

季音花

佳境 正木萬蝶

草の実にまみれ初恋叶ひけり
華やぎを残す秋蝶如何にせむ
冬となり魑魅すだまの影のいよ濃し
秋闌くや鬼女の宴に紛れ込む
「大河ドラマ」の佳境に入りぬ冬隣

異界 近藤徹平

「百穴」の異界の気配後の月
後の月島の駐在警邏中
異体字のボトル打ち寄せ秋深し
枯葉飛ぶ忠治破りし関所跡
冬の海船名失せし難破船

冬紅葉 佐々木典子

天光をあつめはなやぐ冬紅葉
葦を焼く音は夜半か神の旅
旅立ちの近づく神に祈りけり
風落ちて大地にとがる冬の星
からころと落葉追ひ来て追ひ越しぬ

神無月 大塚茂子

田の鶴や片脚胸に冬初め
AIを負かす若者文化の日
さい銭のかるき音なり神無月
御社の植木刈り込む神無月
湯の街に下駄音響く今朝の冬

初霜 井上玲子

しぐるるや嵯峨野路いそぐ人力車
ゆくりなく時雨に出会ふ渡月橋
初霜や指呼に立つ富士神さぶる
芭蕉忌やししみ句碑を光堂
ながらへて新蕎麦を食むゆたけしや

落葉道

石川理恵

文机の木目にまぎれ木の葉髪
枇杷咲くやいくたびも文書き直し
外国人多きアパート枇杷咲けり
鷗外の学びし園の落葉道
帰還する目印となる冬北斗

髪あぶら

河野はるみ

鉛灰色の雲せまり来る冬隣
初霜やまづは右足そつと踏む
朝日射し紅浮く垣の山茶花や
山茶花や祖母のほひの髪油
「……細道」を逆さに辿る翁の忌

真直くなる

青木鶴城

新刊の帯の処遇や文化の日
画数五の永字八法初炬燵
真直くなる信念の煙紅葉散る
少年狼を愛す秩父の山野冬
飽食の時代の矜持開戦日

寂寥

日高道を

ふる里の山河は並べて秋さびし
五百羅漢の五百の顔にある秋思
寒禽の声ぞ悲しき心字池
村時雨街道をゆくチンドン屋
格別の尼僧の笑顔もみぢ散る

冬 堇

野田静香

本音語らず逝きし人落葉雨
耳澄ます水琴窟に冬紅葉
指しなやかに「聞えのクラス」冬堇
いにしへの風を呼ぶ句碑紅葉散る
冬晴や韓紅の水鏡

茶の花

石田慶子

レシピ付き母の小包冬隣
茶の花や納戸の隅に「婦人画報」
茶の花や明治女の泣き黒子
秋澄むや手を振り返す遊覧船
病床の友の覚悟を知る秋思

時 雨 熊倉千重子

S Lの汽笛くぐもる夕しぐれ
小夜しぐれ言葉少なに二人連れ
新生児室窓に小春の日が覗く
おでん鍋話いつしか解けゆく
木枯や女学生らの声さらふ

かぶと煮 福田千春

茶の花や遠州墳墓苔むして
指の腹ふやかす長湯冬隣
ココアの香部屋に満ちたり冬隣
外つ国のもろもろ背負ひ鳥渡る
熱爛やかぶと煮の目に睨まれて

枯 葉 野平美紗子

枯葉踏み見上ぐる空に大星座
破れ蜘蛛の巣柿の枯葉を引つ掛けて
足早の吾を追ひ越す枯葉かな
小さくとも朝顔なほも暖冬に
足早に過ぎたる今年はや立冬

冬 茜 宮崎チアキ

新鋭の介護ロボット文化の日
「古」のつく二つの川や秋の声
雨天決行赤いセーター選びけり
突然の友との別れ夕時雨
冬茜キリン親子のシルエット

酉の市 田中章嘉

雨音のいつしか止みて酉の市
笑むおかめ売手買手の酉の市
大熊手タレントの名の真中に
竜泉寺熊手担ぎて過ぎりけり
酉の市屋台末端寂しさよ

枇杷の花 瀬戸雄二郎

枇杷の花黄昏時は人恋し
今日もまた喪中欠札枇杷の花
枇杷の花清貧されど落ちこぼれ
冬の星少し温めの露天風呂
停電で騒ぎだしたる冬の星

冬満月 葛城 千世子

皆既月食時を忘れてちやんちやんこ
首痛くなるほど見入る冬満月
つかの間に屋根のぼりきる冬満月
冬満月悩みとぶまで見つめをり
冬の月澄みし明かりに包まるる

柿紅葉 中野 疆

見上ぐれば日毎殖えゆく寒椿
朝日さし錦となりぬ柿紅葉
庭柿並べ笑顔つややかなりしかな
総選挙かすかな票を秋の雲
蜜柑むく指先確か誕生日

長き夜 後藤 綾子

凡庸に暮らす毎日夜の長し
煌々と進学塾の長き夜
鮫鯨の服脱ぐ様に皮をはく
鮫鯨の顔のちらつく夕餉かな
地震去りし夜更けの庭をつづれさせ

秋 宮崎 紫水

秋の朝児童の列に歌のあり
秋の昼煙ほのかに柵引けり
秋夕と加速度競ふ家路かな
懐旧は次から次へ秋の夜
アルバムを何度もめくる夜長かな

秋から冬へ 下川 光子

バスを待つ白き足首朝寒し
犯人は無人カメラに猪通る
とびきりの青空貫ふ七五三
茂みへと山鳥の尾よ夕時雨
金管の音色高らか冬銀河

秋刀魚の日 川島 典虎

大根を貰ひ増えたる夜の献立
秋刀魚の日でんでにうるさい焼き加減
年寄のほまちの冬菜瑞々し
田舎から来し大柿に仰天す
山茶花に頬寄せ妣を呼んでみる

現代俳句鑑賞

網野月を

女瀧ひとすぢ岩つたひ岩はなれ

井上康明

〔俳壇〕11月号・銀髪より

九・五・五のリズムであろうと解した。「女瀧ひとすぢ」は一気に読み下したいし、「岩つたひ」「岩はなれ」は五音の等価として鑑賞したい。表現する内容が、形態を選択することということであろう。他に「銀髪をかき上げて酌む菊の酒」がある。

木偶がしらころがつてゐる夏座敷

福島せいぎ

〔俳壇〕11月号・夏の終より

中七には「ころがつてゐる」とあるが、誰かが放っておいたわけではないのである。あくまでも状態を描写しているのだが、それでもきれいに整頓されて多分、何の家具なども置いていない「夏座敷」であるので、「木偶がしら」が野放図に放置されているように作者には見受けられたのである。つまり「ころがつてゐる」のは作者の心象を反映してのことなのである。ということは「木偶がしら」を配置したところの「夏座敷」が微妙なのであって、座五の季語が効いているということなのである。

銀杏やかさなつてゐるタイヤ痕

西山 睦

〔俳句〕11月号・十月桜より

景を確実な眼で捉えて、その中の何を言葉にするのかを確信をもって抽出している。饒舌でもなければ、まして舌足らずなことにはならない。つまり、言葉への揺るぎない信頼感がある。このコントロールされた創作の世界を演出しているのである。一つ一つの言葉のディスクール（言説）がピタリと嵌まっているのである。他に「みどり女忌過ぎて十月桜かな」がある。

魔法瓶ちよつと傾げる草紅葉

太田土男

〔俳句〕11月号・草紅葉より

ピクニックか何かであろうか、アウトドア的なシチュエーションである。レジャーシートを野に広げて、持参の弁当を広げて何人かで昼食するのである。楽しいひと時だ。その際に温かい飲み物を入れてきた魔法瓶の所在が気にかかる。栓はぎゅつと締めたもののやはり立てたままに置きたい。人情である。少々安定性に欠けて、「ちよつと傾げ」ているのは季語「草紅葉」だけで、これほどの想像を掻き立ててくれる

句である。「魔法瓶・傾げる」の主語述語の関係性が、句にストーリーを作り出している。他に「散骨を選びし人や星月夜」がある。

ひとそれぞれ違ふ時間の長き夜

西村我尼吾

〔俳句界〕11月号・新作巻頭3句より

「長さ」と客観的な表現が句の肝であろう。速さなどと俗なことは、つまり主観的なことは言わないのである。潔さであろうか、ある意味では達観であり、もしかしたら諦念かも知れない。即物でない俳句の世界に魅力を掻き立てられる一句である。他に「祖国へと戻る色無き風の中」がある。

正座して教え子を待つ冬の山

山口木浦木

〔俳句界〕11月号・正座より

「待つ」のは作者本人か、それとも「冬の山」なのか。多分両者であろうと想像した。作者本人ならば、座五の季語「冬の山」は待っている空間を指示しているし、「冬の山」ならば、教え子の故郷にはこの「冬の山」があるのである。両者ならば「冬の山」が「教え子を」待っているのであり、同様に作者自身も待っているぞ、と遠くから呼びかけている構図である。「正座して」いるのは「冬の山」でありまた作者自身でもある。待っていてくれるものがあり待っている人がいる安らぎのようなものを感じる。「正座して」で「冬の山」の在り様と作者の心の構えも見えてくる。他に「残され

た霧の凶器の早送り」がある。

新涼の畳に広ぐ文字の息

仲村青彦

〔俳句四季〕11月号・秋より

息遣いの伝わってくるような書き物が畳に広げられているのだ。上五の季語「新涼」だからではあるが、「文字の息」遣いを感じ取っている作者の感性もまた尋常ではない。教師の天分であろうか。

声かけて稲架組む二人夕間暮れ

野木桃花

〔俳句四季〕11月号・金木犀より

稲架を組んでいるのである。稲を架ける用意をしているということで、まだ稲を架ける前であり、「夕間暮れ」であるから多分明日は稲刈りなのであろう。息の合った二人の掛け声が聞こえてくるようである。他に「風通ふ死角にありて金木犀」がある。

長き夜をサロメの挿絵見て厭かず

後藤章

〔俳誌「自鳴鐘」11月号・漣光集Ⅱより〕

A・ピアズリーの挿絵であろう。耽美主義的なO・ワイルドの物語にユージェント・シュテイル様式の挿絵が思い浮かぶのだ。一句仕立てに上五の「長き夜」が照準されているし、句末の否定形が句の方向性を決定づけている。構成力抜群の作句である。

『水明誌』を繙く（水明十一月号）

竹内宗一郎（天為同人、
街同人・編集長）

流れ星落ちては増ゆる漁舟 五明 昇

夜空を滑り落ちて行く「輝き」は流れ星。それが消えた時、海上に見える漁舟の灯が増えていることに気がついた。まるで流れ星が漁舟の灯になってしまったように感じられた。流れ星は一つではない。複数確認できたのだろう、そのたびに漁舟の灯りが増えていくような感覚。

流れ星に願い事をするそれが叶うなどと言われていることから、この季語を「星に願いを」的に捉えて詠う句が多い。そうなる但凡庸。この句は違う。流れ星の落ちてゆく残像から視線もすうつと海面に落ちてゆく。そこで漁舟の灯が目に入り、その灯りを放つ舟に改めて思いを馳せる。

筆者は、少年の頃、山陰で見た、イカ釣り船の灯りが並んでいる光景を思い出した。空が暗くなるとともにその灯の数は増えてゆき、それはとても幻想的な光景であった。掲句では「舟」となっているからそれほど大きな船ではないだろう。

流れ星が落ちるたび、漁舟が増えるというのは、錯覚なのだが、夜の輝きを捉えた確かな景と、その錯覚がこの句に優れた詩情をもたらしたのだと思える。

点滴の音の確かさ 台風来 瀬戸雄二郎

点滴が好きな人も少ないだろう。装置に吊された袋から静脈内に注入されてゆく輸液の落ちる音、それがはつきりとリズムを刻んで聞こえてくる。点滴の微細な音を感じる作者の研ぎ澄まされたような感覚、更にそこから台風が来る気配へと飛ぶ、そのバランス感覚に感心した。

最近、地球温暖化の影響か、台風の来る時期も広がりつつあるが、従前は、立春から起算していわゆる二十日の頃に日本列島に接近して甚大な被害を及ぼすというようなイメージだった。熱帯低気圧のうち最大風速が十七メートル以上に発達したものを台風と定義するので、テレビの天気予報で「台」の字の進路を見ていて、日本地図に上陸が予想されるときなど、何か巨大な怪物が近づいてくるような感覚に襲われることがある。一方、掲句において点滴を受けていることと台風の間には直接の関係は何もないのだが、台風の気圧の変化、大気の変化とこの点滴の音が見事に呼応して微妙な何かを醸し出している。その何かがうまく説明できないが、そこにこの句の魅力があるように思えてならない。

俳誌望見 梅澤佐江

『郭公』 令和三年一〇月号 通巻一〇六号

主宰 井上康明 発行所 山梨県甲府市

平成二五年一月、井上康明が山梨で創刊。師系飯田龍太・廣瀬直人。「心を養い育てるよすがとしての俳句をめざす」を理念とする。(月刊)

主宰詠「白雲」八句より

白雲の山の鎮まる涼夜かな

北海道大雪山国立公園の南端に位置する百名山の白雲山へハイキング、ガレ場と然別湖のコーボが美しく秘境のような溶岩ドーム群を堪能した後宿に落ち着く。夜の帳が下りると山は闇に閉ざされ、神が鎮座するかのよう静まり返って、澄んだ境地となり涼しさもひとしおの作者。

独活の花朝日に拳ほどひらく

山野に自生する独活。白い小花が球形に集まって密やかに咲く野生の寂しい美しさが印象的である。へとへとになりながら山道を登る時、其のあえかな風情は一服の清涼剤となり俳味をそそられるのではないだろうか。

重陽や百寿祝ぐこゑつどひ

百寿、正に長寿の代名詞とも言える一〇〇歳というご年齢、この記念すべき人生に於ける大きな節目をお祝いする為、ご家族総出で重陽の宴が盛大に開かれている。「こゑつどひ」に和やかな臨場感が溢れて来る。

「大菩薩峠」は未完鳥渡る

中里介山の長編小説。幕末が舞台で虚無に取り憑かれた剣客机竜之介を主人公にし、仏教思想に基づいて約三〇年に互り人間の業を描こうとしたが、作者の死により未完となる。数多の登場人物は慶応三年秋の日本各地をいつまでもいつまでも彷徨い続ける。渡り鳥でさえ秋には日本を冬を越す為に渡って来るのであるが、「鳥渡る」の季語が諧謔を誘う。

蛇笏忌の紺滲みたるペンの先

住み続けた山梨県境川村を愛し、人と自然を大切に思う気持の散りばめられた龍太の珠玉のエッセー『紺の記憶』と『紺滲みたるペンの先』が心象と共に響き合い、作者の師龍太への畏敬の念を感じずにはいられない。

同人作品 主宰選 二二名 各三句より

赤子睡りて炎帝を畏れざる 山崎満世

壇特に選挙ポスター皆笑まふ 長田群青

うぐひすや竹藪近し墓近し 中谷のお

どくだみの乾ききつたる月の暈 稲垣紀子

陽はてらてらと風にゆれ黒葡萄 石原林々

郭公集 主宰選 七十七名 各五句より

失ひしものひとつづつ天の川 河村祐子

八月六日碧空へ鳩放つ 二又淳子

観音と涼しき風の中にある 金丸 保

『飯田蛇笏忌特集』として、平松氏のエッセー「音なき音」、持地、清野、河村、田川、田代、八代の六氏による「蛇笏句鑑賞」は恭敬して止まない蛇笏の句と向き合い、句の魂に触れようとする真摯な姿勢に心を打たれた。

山本鬼之介 選

水明集

翠巒や静寂を破る鴟の声
絹の道砂漠に刺さる月の劍
モンブラン天辺にのる丹波栗
秋の夜や柱時計の音近し
城壁を攻め登りたる蔦紅葉

さいたま 反町 修

一切が霧遠ざかる櫂の音
霧走り忽然として碧き湖
粃殻を隅々探り手に林檎
テレビニュース聞くともしに栗を剥く
ダム底に沈みし村や秋の声

上尾 横山 君夫

秋の雲防災ヘリが旋回す
冠水の刈田に浮かぶ雲早し
刈田道沈む夕日に合掌す
刈田風納屋に収まるコンバイン
行く秋や山の水引く蕎麦処

さいたま 笹本啓子

コスモスの風ふところに仕舞ひけり
秋高し栗きんとんの幟でる
秋桜じつと見たらば穢れだす
秋の蟬死してなほもて遺さるる
後の月酒杯に満つる夜の気配

元田 亮一

京に嫁し友京訛り古都初秋
母いつも聞こえないふり秋簾
目も口もしばしすほまる青蜜柑
名月や高架行き交ふ電車貨車
十三夜尾灯小さく走り去る

本橋 稀香

霧しぐれ川音著き柚の道
秋の声白鳳仏の欠けし指
瀬の音に洗はるる身よ秋日和
秋茄子の先に留まる一雫
林檎放る妻の直球受けそこね

曲淵 徹雄

八丈の秀家像や月の雨

さいたま 保坂翔太

平塚 丸屋詠子

お裾分けと笹に松茸江戸氣質
秋めくや一朵の雲が秀峰へ
新米の塩おにぎりや妣の声
満月やうさぎも写るにはたづみ

慎ましき武将の廟よ暮の秋
縄文の遺跡に夕陽秋の暮
湿原の果てなき地平秋高し
身に入むや薬罐の湯氣に手をかざす
芋虫の漆黒に目を奪はるる

佇みて刈田見つむる母の影

西幅公子

東京 鈴木和子

手押し井戸そばに甘柿熟れてをり
村中を被ふ市田の柿簾

裏山は古墳の森よ鴟日和
部戸を締むる僧侶や秋深し
成婚の祝の肴二夜の月

たたなづく夕映えの山秋深し
故郷への受話器置く音秋深む

下り鮎岸辺の宿に魚拓の香
山里の軒を豊かに柿すだれ

無頼派の墓に御神酒を秋麗

染谷正信

さいたま 新 曆文

若い衆は何処にも居らず村祭
茸狩り凶鑑片手に獣道

黄昏の刈田にのぼる煙かな
果報待つ秋の夜長のヘッドホン
川下り終へて茶店の椀団子

霧の村忠治を慕ふ民いまま
落武者の潜むけはひや芒原

水たまりに映る美空や野分あと
レモン噛れば煩惱ひとつ消ゆるかな

千枚の刈田の先に日本海

渋谷きいち

梅澤輝翠

刈田ゆく宝積寺から烏山
NHKラジオ体操庭レモン

初冠雪やあれやこれやと心だつ
足早に心心の暮の秋
やや寒の鉄瓶の鳴るポコポコと

皺皺の婆のみそ焼とちだんご
美しきもの捨てて明日へ銀杏散る

天高し引く手数多の角隠し
新米や招待券の飛ぶ一日

深ぶかちとチップ敷く径鳥渡る
秋思濃き男の像の瞑目よ
なにげなき挨拶土手に草紅葉
探鳥や沼深閑と鶴待つ
遠く迄声の届きし秋の原

さいたま 橋本京子

虚ろよりかはる華やぎ十三夜
錆鮎や顔たくましき生さぎまよ
秋風や変身迅き項の白
菊覚めて風の甘さに満ちたれり
柿簾一列づつの色をもつ

熊谷 神田治江

さざ波の光の中を鮎落つる
山里の風に粉を吹く吊し柿
柿吊す節くれ立ちし母の指
ふと胸をよぎる余生よ十三夜
産土に続く酒蔵秋気満つ

熊谷 越田栄子

天空を歩むが如く秋高し
秋高し無窮の空を飽かず見る
秋陽さすへやに赤子と利発猫
鹿の背のしつとりぬれて秋時雨
屋根葺のあわてふためく秋時雨

さいたま 山岸久美子

初嵐眠れぬ床の「深夜便」
友垣と遊びし古墳草紅葉
深山路を行けば密かに草の花
竜田姫参道抜けて山染むる
何処より遠吠え聞こゆ夜半の秋

さいたま 村杉清吉

ひとり身の気儘な暮し放屁虫
紫が好きときつぱり濃竜胆
青天に雲は流れず秋の晴
水澄むや釣り師二人の黙続く
枝豆や傍にお手拭き置かれをり

若狭 山崎郁子

錆鮎に蓼酢とろりと宿の膳
軒並に吊し柿あり飛驒の里
秋深しまロングラッセ熟成中
樟脳の香りほのかに秋深し
芋水車小幡の里の秋深し

高崎 原田秀子

今年酒できた知らせの酒林
利酒の人でにぎはふ蔵の中
気兼ねなき親子の会話新酒かな
独り居や灯火親しみ句を作る
くつきりと秋明菊の咲く芝生

杉戸 佐々木史女

秋の灯や酒慎めと仏間から
聞耳を立つればやさし虫の秋
みちのくや車窓に映る初紅葉
眺望や夕陽潮風島レモン
庭隅に父の形見のレモンの木

さいたま 新井孝磨

朝霧にかき抱かれし湖沼群
摩周湖の吉祥を呼ぶ濃霧かな
文脈と蜜嚙み締むる林檎便
秘め事のひとつやふたつ林檎剥く
高原の霧のベールや松林図

春日部 諏訪サヨ子

雲仰ぐ丸テーブルのレモンテイ
レモン生り虫も好みし香りかな
拾ひきし落穂を活くる土瓶かな
秋茄子の茎の色佳きプランター
果てしなく夜空を埋むる秋の星

塩野久子

やや寒し巡礼古道草茫々
祭りのごとく一家総出の刈田かな
秋澄むや実家は空家雨戸引く
門出を祝ふ水引の蝶秋高し
柿八年を待てずに逝くやお供へす

さいたま 竹澤和子

女坂市電のスパーク見つつ下り
山の畑三日來ぬ間に猪の穴
豌豆播く遠見の鴉じわじわと
それぞれに自己主張して刈田株
石路の花門前の猫腹を見せ

伊予 向井章子

深山の仏さやかや明通寺
秋爽の大工飛び乗る棟木かな
待ちわびてさやけき声に上ぐる首
鈴の音の耳にさやけし吉野山
濡れ苔の紅葉かつ散る庵かな

若狭 檜鼻ことは

杉玉の色眺めつつ新酒待つ
霧襖木道の果て定まらず
隊列の一人づつ消ゆ霧の中
待つ人のゐてこそ送るリングゴかな
お好きにどうぞ赤いリングゴで迎ふる宿

春日部 仲田利子

山間の駆け込む蕎麦屋秋時雨
鄙の家の情けひとしほ秋時雨
身に入むや利休鼠の志野茶碗
押し花のごとく秋の蚊経本に
朝寒の手の強張りてグーチョキパー

さいたま 清水桂子

どこまでも一面刈田日本晴

さいたま 篠崎紀子

原つばのやうに刈田を駆くる子ら
不意の客薄きレモンの紅茶出す
レモン描く白いパレット黄に染めて
ぶだう棚果汁重たき房を剪る

鬼皮と格闘一日栗おこは
目白通り「予約制です」栗おこは
秋真昼化学計算単位モル
秋麗にいかに暮るるやホスピス棟
洋館に迫る薄暮や秋の声

さいたま 小林京子

林檎売り語尾に故郷の訛有り

伊奈 菅原卓郎

親不孝わびて殻割る落花生
林檎売り白熱球に頬を染む
はにかみてズボンに擦る林檎かな
待つ人の肩にすぎなき秋時雨

旅写真見せ合ふ茶房秋日和
小檜の実火葬式てふ別れかな
貰ひ来し櫟の殻斗文机に
犬連れて渡る陸橋西日中
山寺のささくれ擬宝珠秋日和

田中泰子

語らへば吸ひ込まるるや秋雨に

さいたま 菅原真理

葉を落し残る熟柿の耿耿と
刈田道遮るものは何も無し
心にも沁み込む冷気今朝の冬
ぼつんと熟柿一番小さき夕日かな

大海の風が誘ひ雁渡る
鍋音のふつつつと雁渡る
存分に風を遊ばす刈田かな
大根引き大地に充たすしろしろ
隈取りは男を上げて村芝居

川田政代

そのうちと別れて会へぬ雁来紅

加藤でん治

秋高し二股道の右穂高
千手観音一手に宿す秋思かな
とりどりのコスモス揺るるフラガール
小鳥来る漂流ポスト待つ浜へ

目覚むれば変はる子の位置長き夜
身に入むや病の母へ笑顔見せ
青空が裏打となり鱗雲
初紅葉沼に仄かな彩散らす
山があり澄む川のあり下り築

斎藤みよ

秋風や公孫樹静かに時を待つ
焙煎の匂ふ下町落花生

越谷 阿部幸代

秋雨が浸み入る名画座の通り
湯の街に夢二をたどる秋時雨
滾つ瀬を越ゆる大橋利根の秋

人生の苦み愛しや零余子飯

吉川 杉浦理恵

秋さびし牽かれ行く貨車闇の箱
菊の日や百歳雛の悟り顔

年金便り睨み菊酒ぐつと干す

小言がはりに塩二つまみ零余子飯

起き抜けの寝不足顔や敬老日

さいたま 水野興二

残る蚊や老の眼鏡にぶつかりし
七日目に待ち焦がれたる赤蜻蛉

能筆の友の文読む萩の庭

勝越しに嬉しい汗や九月場所

光年の星に仮寝の夜長かな

小浜 松島寛久

おもちや箱明日が待てない夜長の子
菊持つて皆泣きました棺の紅

二学期やマンボズボンの奴が来る

初恋は弁天の微笑初鴨来

さいたま 遠西勢津子

鷓猛の高き梢の天辺に
風乾き空の澄みきり鷓日和
秋高し心の弾みいつまでも
やすらぎは晩年にあり秋高し
コスモスに今日の終りの夕日かな

退院うれし二人で走る刈田道

森下美智枝

代々の我が家潤す老樹栢
やや寒しシチューの夕餉早めたり

秋雨やびたりと止まる救急車
去年たわわ今年寂しき富有柿

摩訶不思議地球に繭を落花生
テレビづけ南京豆の殻の山

飯田忠男

公害や動かぬ海亀秋夕焼
参道を傘ちらほらと秋時雨

天高し支流数多の大利根川

石庭の箒目清し秋の朝

草加 外村紀子

千枚田案山子見やるは日本海
水鳥のしぶき煌めき秋夕焼

群鳥の飛び立つ朝や秋めけり

秋深し昭和のメロデー深夜便

仏壇に朝の報告富有柿

「引出しの底に恋文長き夜

秋茶席道具合せの心かな

秋しぐれ鍋島焼のモニュメント

利発の子今は凡人古酒を飲む

さいたま 野村美子

北の空ミサイル見たか雁に問ふ
頬杖で「サザエさん」読む秋の午後

笑ひ茸食べたく思ふ夕べかな

日当りの出窓に並ぶ八頭

秋の空いやなやつへのお体哉

さいたま 綿貫ひさの

やや寒に湯ぶねにつかる夢心地

筆柿やいの一癖にかぶりつく

箱に柿「どうぞ」の文字の真偽かな

引退に土俵の記録秋びより

刈田行く雀群がる穂の恵み

小川 洋子

錆鮎の旅の終焉尾白川

干し柿の出来は上々婦人会

母の背に合はせて低し柿簾

枯露柿を右手に確保餓鬼大将

錆鮎の橋の陰にて色を増す

東京 飯室夏江

国境の花野の果てや嶺高し

見ゆるものすべて刈田や弥彦山

首落つる案山子の胸にロゴマーク

朝一のナイスショットや曼珠沙華

デパ地下に新しき銘の今年米

池田 珪子

孫達に看取られし夫蘭の秋

ちちははのお側へ夫や秋桜

出棺へ夫の歌声九月尽

葬儀終へ天を仰げば鰯雲

大盛の栗飯供へ車座に

和歌山 嶋田洋子

オンラインに身内の安堵雁渡る

濡れ色に変はる三和土や夜を寒み

露けさや朝餉の野菜挽ぎ立つる

新蕎麦の旗が客引く道の駅

雲流れ聞こえてきたる雁の声

岡田 宣子

草紅葉と教へられしは何時のこと

夕刻の彩はいのちと草の花

撫子や福島訛の隠し味

弦月を飛行機かすめ過ぐるまで

対抗のヘッドライト吐く秋落暉

さいたま 和田仁八郎

満月や明るき街の雑踏に
彼の女の逝きしと便り赤のまま
廃線に抗ふ如く明治草
香に立ちて視線惑ふや金木犀
枯蠟螂墓石に縋り祈る形

東京 水落守伊

幸不幸数へ計れば秋の虹
乗り継ぎも計算通り秋の山
夕霧やスカイツリーの消えし窓
ハイヒール霧に消えゆく靴の音
霧に包まれこのままここで眠りたし

東京 山中いちい

しばらくは憂き世離れて高原の秋
山を吹く風は天空秋の色
女郎花ひそと山路に咲き残る
なすすべもなき程雑草秋はじめ
折りとりて穂芒荘の机に供へ

河原 叔子

露含む青き匂ひや朝の森
傾ぐ舟見上ぐる夕の雁の列
深更に愁夢見たるか雁が音の
地理気象天文知らず雁渡る
応援の歓声聞こゆ秋うらら

さいたま 横山礼子

朝の露眩いほどのきらめきや
いつしゆんの露の輝き草の上
白露や真珠のピアスつける姉
連なりて飛び立つ雁を父と見る
雁帰る空に消えゆくVサイン

さいたま 木村るみ子

手作りのレモンケーキに吾子の悦
新蕎麦や暖簾を潜り覗き込む
筑波嶺の秋の雲間に街望む
秋雲に紙飛行機の大旋回
先の先小さき背中の刈田道

武田 重子

寄り道のアサギマダラや背戸の庭
胡桃落つピンと立ちたる犬の耳
霧雨や魚の群れの影動き
ホスピスに明りともれる秋の暮
絶妙のうつむきかげん案山子立つ

鬼石 榊原聰子

鳥渡る古木の空ぞ平林寺
橋向かう月白々と高速道
朝寒や木槌の音の甲高し
柚子の香の染みたる指の夕餉かな
手をつなぐ子等は仰ぎて秋の虹

霜多 光代

若輩に礼尽くすひと敬老日

通勤の靴片減りし秋の雲

敗荷やリングに沈む「あしたのジョー」

鬼柚子の店の奥なる凄味かな

新松子昇級祝ふエアメール

花開くがにバラ色の月昇り初む

天心の月皓々と世を包む

秋雨や跡継ぎし子の地鎮祭

学童の野外学習暮の秋

赤蜻蛉追ひつわらべと谷戸の宮

秋出水新幹線の列無言

里山に地唄の聞こゆ竹の春

瓦堀より蒼蒼と竹の春

八分音符に菜を刻む音いわし雲

地平線の果ての明るさ落穂拾ふ

肌笑ふ飛驒の湯宿や栗おこは

山粧ふ下呂の湯近し九十九折

丹波路を横切る猿や栗の飯

峰めがけ鏝の如く雁わたる

露しぶき沼を見下ろす笹の尾根

大阪 遠藤人美

宮代 関谷多美子

川崎 鈴木玲子

さいたま 秋谷風舎

騒がしき樹上の鴉木の実落つ

秋夕焼シンボルタワーの眩しかり

御輿倉全開にして秋うらら

秋茄子の糠漬よろし一人酒

姉米寿弟傘寿栗御膳

糸瓜垂れすべすべ肌のみどり増す

長へちま園庭の子の声はづみ

秋祭名入提灯揺らす風

体育の日に靴紐の新しく

素振りする生徒一人や秋の暮

秋めくや風吹き抜くる厨口

秋めきて友への便箋選びをり

西日射す学舎閑か法師蟬

つくつくし母の遺愛の詩集かな

晩夏光トップの選手去り行きぬ

胸の内しばしほかすや空高し

草枯れの山にあはれや鴟の贅

秋高し飛行機雲のま直ぐなり

枝々が日をこぼすなり秋高し

終電を逃し道連れ後の月

蕨 細井良子

東京 柳父はる

さいたま 後記朝香

川口 新井のり子

青い空呑み込んでゐる秋夕焼
紅葉と競ふがごとき落暉かな
鰯雲寄りて鯨に空の「スイミー」
桔梗はゼボンといふ音聞いたよな
通り過ぎふと振り返り金木犀

東京 畑宮栄子

敗荷や突如くづる水管橋
南北の明暗わか秋の川
秋暑し大渋滞の迂回橋
蛇口よりほとばしる水今朝の秋
「パタカラ」と口の訓練ななかもど

和歌山 高橋満耶子

海を越え星を測りて雁の列
雁行やリーダー力のなせる業
孀恋や朝露光る丘の上
芋の露私の願ひ輝きて
体力をつけて林檎で医者知らず

さいたま 小駒さち子

被災跡コスモス揺れに揺れてをり
コスモスを一輪手折り恋占
コスモス野速度弛めるローカル線
ため息の歯にしみてくる夜寒かな
家人無く常夜灯のみ点く夜寒

さいたま 北出久美子

仄暗きくぐりに落つる後の月
坂上がるコスモス笑ふ千鳥足
コスモスや風受けて知る己かな
秋桜転び重ねるやせ我慢
十三夜母の温もり手に残し

草加 持永喜夫

月あかりコスモスの丘浮かしけり
子の嫁ぐコスモス強く咲き満ちて
栗旨煮手間を惜しまぬ母の味
竹取りの翁を思ふ十三夜
時忘れ名残の月と長湯せり

岡田芳春

縄飛びの又ひつかかる体育の日
気の晴るる新のスニーカー体育の日
父と子のキャッチボールや体育の日
藍色の好みの小鉢菊脛
祝膳の食べるに惜しや菊脛

さいたま 高原和子

十代の思ひ出胸に十三夜
岩間から静かに流れ秋の水
太陽の光の中の稲穂かな
秩父路や右に左に柿赤く
どんぐりの坂道進む青き空

鬼石 加藤ナヲ子

秋雲を茜に染めて夕日落つ
コロナ禍や新蕎麦啜る音低し
明日もまた元気に遊べ秋夕焼
単色となる土手景色秋深し
出立を浅間の霧に阻まれし

さいたま 鈴木藻好

風音に鶴の渡りや夕茜
うす暗き空になほあり鱗雲
母のゐる灯ともる厨秋の暮
箒目の影くつきりと秋うらら
たわわなる檸檬の向かふ瀬戸ブルー

さいたま 奥山粉雪

熱熱の味噌汁旨し寒き朝
朝寒や一刀彫の鷹の爪
富士見ゆる橋のある町いわし雲
抜けし歯を屋根に放る子鱗雲
釣人の見詰むる川面に鱗雲

森 和子

駅頭の旗なびかせる年の暮
亡き母のおほやうなりし隙間風
痛きこと冬薔薇の葉ままならぬ
山と里さかいめのなく雪化粧
母と姉婆も女の女正月

所 沢 関根千恵

コスモスや風を見送る形して
ほどのよい形に並ぶ鱗雲
寄せ鍋を煮返す朝は独りきり
見覚えのコート目で追ふ歩道橋
古コート隠しに残る搭乗券

安藤みえこ

虫喰ひの幟へらへら村祭
旧道の一日賑はふ秋祭
「毒消し」と託つ盃茸鍋
安心も味の一役茸汁
牛啼きて誰も応へぬ霧の海

さいたま 森美枝子

草の露命の水のひとしづく
露の玉光の反射きらきらと
そぞろ寒体を巡るミルクティー
雁の群れアーチ橋へと消えにけり
かりがねや北国行きの切符買ふ

樋口元美

美しくあれと名付くる神無月
橡餅や一つ味見のバス旅行
秋高や果敢に攻むる女子ゴルフ
未だ青く固く寄り添ひレモン生る
機上より眺むる刈田佐賀平野

鳴海順子

敬老日百歳の人歩き来る

施設入り一人眺むる鰯雲

靴脱げし子にも拍手の運動会

炎天下ふと思ひ出す鉄兜

秋祭り白足袋脱ぎて終りけり

さいたま 川村 治

秋高し月満ちてこそ静かなり
秋高し枯田の道のどこまでも

終活は心はづまぬ夜ふけかな

秋高し運動会の子等の声

鳴共が残せし柿の渋さかな

川口 田村福美

秋雲を背にして鳶風に乗る

新蕎麦の幟にひかれ店に入る

新蕎麦を黙々啜る親父殿

添へられたレモン食む子のしかめづら

行列し目指すは何処鰯雲

湯浅 和

父の忌はいつも手造り菊贄
ピストルの合図一瞬体育の日

猪口を手に機嫌よき父菊贄

スケボーに目玉くるくる体育の日
体育の日ミイラ取りがミイラになる

さいたま 山下ユリ子

槽たたく亀の親子や秋の夕

毬栗を宿としてゐる蛙あり

破蓮や急勾配を父の墓

秋の川亀と鯉とは共存す

秋の暮断水解消と晴の声

和歌山 南條きわゑ

秋うらら鼻を抜げて猫伸びる
大空に雲の遊びて秋麗

栗飯のふつくらと炊け客を待つ

秋の雲鰯羊に七変化

芋の露ころり転がる風まかせ

石浜悦子

食卓を囲む笑顔や十三夜

コスモスの街道時速20Km

コスモスゆれピンクの帽子見え隠れ

納車終へ参拝すませ温め酒

十三夜はづむ話やすすむ酒

さいたま 川島夕峰

鄙のまち栗名月を飾る窓
主なき狭き庭にもあきあかね

十三夜夫帰る道照らしゐる

十三夜盃ふたつ佳人待ち

竹内万美

湯浴みして薄紙のごと月のあり
薄明り眠れぬままの朝月夜
柘榴乗せ模様かくれし絵皿かな
今生の痛み隠して袖子の棘

さいたま 小山敦子

よハビリや順番取りの朝寒し
他所の児の成長早し七五三
新米やマスクはづして香り聞く
誕生日雲間の月は神の色

藤 沢 小島喜代子

コスモスや遠山白き雲流れ
稔田の黄金まぶしき転院車
整列の稲棒増えゆく日曜日
ハロウインのお化け廃屋夜寒の灯

横 浜 山岸弘子

大空をくの字編隊鳥わたる
薯蕷汁一氣に啜る今昔
長き夜や犬の遠声胸に沁む
どんぐりをひいふうみいとポケットに

さいたま 福田育子

鯖雲や浴室リフォーム憩ひの湯
鯛雲会話が弾む機上にて
鯛雲職人達の凄き技
朝寒や厚手のスモック袖通す

落合和枝

スマホより懐メロ流る十三夜
コスモスや繋ぐ命を子のお産
十三夜眠る赤子の乳の満つ
長き夜や出せぬ答と薄き酒

さいたま 橋爪さなえ

コスモスや川沿ひ歩き毬饅頭
十三夜眼下に広がる街明り
コスモスに「白鳥」響き下校かな
十三夜義母手作りのおこはかな

山 川 順

亀鳴くや判読出来ぬ兜太句碑
籐寝椅子祝辞読上げリハーサル
名月や舳ひの船と海女の唄

小 川 藤間友二

裸子の蹠と川のせせらぎと
霜を踏む下駄の鼻緒も新しき
蟻穴に入る荒屋に仮住まひ

さいたま 吉川拓真

百舌の声ここに有りきと高く鳴く
テールに柿渋を塗る深き秋
ありの実の水の甘さにうなる秋

春日部 駒崎里美

柿干して今日の始まり眩しかりけり

さいたま 緒方みき子

最上川の長旅耐へし秋の鮎
物干しを占領したる吊し柿

蕎麦搔は亡き母の味健啖と

古池恵里子

闇汁の箸が喜ぶ手心へよ

我が自慢鰯大根の軟らかき

❖原稿募集

季音 (雪・月・花) 五句 (巻末添付用紙)

水明集 五句 (巻末添付用紙)

山紫集 一句 (巻末添付用紙)

鼓笛集 三句 (編集部より依頼のあった方)

水明通信・随筆等自由にお送り下さい。

原稿締切 毎月二十五日必着

原稿宛先 水明俳句会 編集部

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇二二

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2022年2月号

特集
俳句の調べ
その心地よさを探る

○俳句における「調べ」とは 筑紫磐井

○調べが美しいと感じる名句 岸本尚毅

○芭蕉が追求した「調べ」とは 大輪靖宏

○破調がもたらす調べの美しさ 黒岩徳将

○調べを意識して作った俳句 自句自解

鳥居真里子 守屋明俊 岩田由美

佐怒賀直美 堀本裕樹 藤本夕衣

特別作品21句 松浦加古

タラヒヒ 俳句界NOW 根来久美子

特集 若手が選ぶ「推し」俳人

岩田奎 吉田哲二 及川真梨子

山本一葉 進藤剛至 西川火尖

村越敦 中山奈々

※セレクトシン結社「加里場」井上論天

私の一冊 高野ムツオ「小熊座」

対談 佐高信の甘口でコンニチハ!

弦哲也 (作曲家)

「俳句界」投稿欄 一流選者14名!
日本一充実の投句欄



※一部変更の可能性があります。
株式会社 文學の森

お求めは... 169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

作品評

山本鬼之介

翠巒や静寂を破る鴉の声 反町 修

漢和辞典によれば、「巒」は「ずるずると続いて切れない」意で、その下の山と合体することで連山＝山脈を表す文字である。「巒」が六書の会意兼形声によるものであることを、本句によって改めて学習した。

さて、「翠巒＝すいらん」の字面と読みの響きが実に佳い。さらに、それに続く「や」の切字によって、読者に、視野の彼方の連山を印象づける。

作者は、人里離れた地に立って、秋晴の空の下に連なる山々をうっとりとして遠望している。と、突如近くの木から鴉の鋭い鳴き声が落ちてきた。快い夢が破られたような気持になったが、これも秋の風物の一つであるうと納得した。

洗練された言葉と文言の構成の的確さが光る俳句である。

一切が霧遠ざかる權の音 横山君夫

この句を定型句として読むと、上五から中七に掛かる句ま

たがりとなるが、筆者は、「一切が霧／遠ざかる／權の音」と、七・五・七の破調句として音読し、俳句が作り出す情景とその情緒を味わった。おそらく作者の心の内も同じではないかと推察する。

筆者は、深い霧に閉ざされた早朝の湖水の景色を脳裏に描いてみた。岸の近くに居た手漕ぎの漁り舟が、場所を替えるために沖へ向けて漕ぎ出したらしい。遠ざかり行く權の音に耳を傾けている作者。テレビ放送が始まる前の時代に、小さなラジオで聴いた放送劇のような印象で掲句を鑑賞したが、濃霧が演出効果に大きな役割を為している。

刈田道沈む夕日に合掌す 笹本啓子

黄金色の稲穂が風に揺れる濃密な景から、今では切株が並ぶ殺風景な田園風景に一変している。農道を歩いてきた一人の農婦。陽が沈む直前の西空が秋夕焼に染まり実に美しい。思わず夕日に向かって手を合わせた。農作物の生育に欠かすことの出来ない土と水と太陽光。農婦の心の中に、お日様の有難みが染みついていて、それが咄嗟の行動に出たのである。心温まる一句である。

後の月酒杯に満つる夜の気配 元田亮一

中七下五の措辞を読むと、月見の情緒ここに極まれりとい

うことになるが、後の月がブレーキ役となつて興奮度を調整し、渋みのあるムードを醸し出している。酒を酌む杯は一般的な猪口ではなく、底の平たい木杯か馬上杯が似つかわしい。庭の闇を支配する虫の音に耳を傾け、傍らの美形が注ぐ酒を口に運び、やおら月を見上げる一連の所作に、平安朝の殿上人を思ふ優美な人物像が浮かび上がってくる。一度でよいから味わつてみたい夢のひと夜である。

京に嫁し友京訛り古都初秋 本橋稀香

娘時代の友人が、縁あつて京都の男性と結ばれ、嫁してから数十年の歳月が流れた。久方ぶりに再会したら、はんなりとした京言葉が身についており、驚きそして感動した。まだ暑さの残る京都の穴場を案内してもらい、旧交をあたためた。

林檎放る妻の直球受けそこね 曲淵徹雄

四月から観続けてきたアメリカのメジャーリーグと日本のプロ野球が幕を閉じ淋しくなった。何と言つても、大谷翔平さんが栄えあるMVPの栄冠を獲得したことが喜ばしい。

さて、曲淵家のマイナーリーグ戦の結果は如何に。奥様が投げる球筋がなかなか鋭いようで、旦那が落球してしまった。林檎や蜜柑などの球形の果物を、手渡しでなく抛つて渡すことがあるが、その所作を直球としたことがこの句の真骨頂

である。微笑ましい家庭の一面を窺えた思いである。

お裾分けと策に松茸江戸気質 保坂翔太

江戸気質とは何か。筆者なりの解釈では、江戸庶民の義理人情の厚さ濃さではないかと思う。時代劇ドラマや時代小説の中で、そういう場面に出合うことがある。

到来物の貴重な松茸を、ほんの少々ではあるが、竹で編んだ策に入れて隣家にお裾分けしたのである。これぞ江戸気質と言える行為かと思うが、松茸ともなれば心が揺らぐのが普通であろう。

たたなづく夕映えの山秋深し 西幅公子

「幾重にも重なり合う」を意味する「たたなづく」が本句を盤石なものにしており、作者の日頃の熱心な勉強の成果だと思ふ。

時期的に紅葉している山もあれば、樹木の種類によつてそうでない山もあり、また、手前にある山と奥にある山との色の相違など、たたなづく山々の色彩は実に様々である。そして、山々を照らす夕陽が、一層複雑で美しい夕映えの景色を演出している。冬の到来を間近にした山々の見せ場である。

霧の村忠治を慕ふ民いまも 染谷正信

国定忠治（本名・長岡忠治郎）は江戸後期の侠客の一人で、上野国（上州）国定村（現・群馬県伊勢崎市国定町）の豪農の家に生まれ、成人して無宿人となり、縄張りを争って数々の事件を起した。嘉永三年八月（一八五〇年九月）に関八州取締出役の役人によって捕縛され磔の刑に処せられた。享年四一歳。国定忠治は、天保の大飢饉で苦しんでいた農民を救済した英雄として、講談・浪曲・映画・芝居・大衆演劇などで語られ演じられているが、新国劇の名優・辰巳柳太郎の演じた国定忠治がぴか一である。一七〇年以上経った今も、現地に昔々の徳を偲ぶ忠治ファンが居ることを掲句で知った。

千枚の刈田の先に日本海 渋谷きいち

日本海側の新潟県や富山県に多く見られる千枚田いわゆる棚田の景色であるが、注目すべきは、永年に亘って培われてきたきめ細やかな耕作技術と多大な労力を傾注する人々の努力である。植田が青田になり、初秋には稲田を黄金色に染めた稲穂が刈り取られる。千枚田を彩った季節毎の景色は切株だけを残した刈田に一変し、今作者の眼下に展開している。淋しい景色ではあるが、日本海の水平線に雄大な姿を没しつつある夕陽の美しさに心を奪われ、改めて千枚田の存在感を認識するのである。

芋虫の漆黒に目を奪はるる 丸屋詠子

芋虫や毛虫に好感を抱く人は殆どいないと思うが、筆者も大嫌いな派の一人である。普段目にする芋虫や毛虫は、どちらも緑色か茶色の系統だが、漆黒のものもいることを識って調べてみた。それによると、漆黒の芋虫の主たるものは二つで、蛾の仲間の「セスジズメ」の幼虫と蜂の仲間の「カブラハバチ」の幼虫。前者は体長8cm以上で里芋や甘藷の葉を好み、後者は大根や蕪に寄生してその葉を食べる。作者の見た芋虫はどちらであろう。

薮戸を締むる僧侶や秋深し 鈴木和子

薮（薮戸）、寝殿造りの建物の建具の一つであるから、平安時代や鎌倉時代の絵巻物などで確認できる。現在では、格式のある寺院に設けられたものと解してよいと思う。秋の彼岸を過ぎてから日照時間がどんどん短くなり晩秋ともなれば午後五時を過ぎると薄暗くなる。まさに釣瓶落しの時間帯である。古刹の拝観時間が終了し、日中開放されていた薮戸を僧侶が締めて行く。日々の作業で慣れているとは言え、枚数が多いと結構大変だろう。夕刻を迎えた寺院の優雅ながらも単調な作業風景である。

レモン囀れば煩惱ひとつ消ゆるかな 新 暦文

若年の頃持っていた煩惱が、年を取ること一つずつ消え

て行くものだろうか。作者が持っている煩惱の中身は判らないが、晩年まで捨てきれなかったとすれば、レモンの刺激程度では無理かと思う。とは言えなかなか洒脱な俳句で、楽しんで使ってもらった。

天高し引く手数多の角隠し 梅澤輝翠

辞書によると、「角隠し」は浄土真宗門徒の女性が寺参りの時に用いた被りもの、となっているが、現代では、婚礼の時に花嫁が被る頭飾りを意味することになる。

素晴らしい秋晴の日に挙式した新郎新婦。打掛けに角隠し姿の花嫁に、誰もが惚れ惚れと見蕩れている。〇〇十年後に生まれていれば俺が、などと、不埒なことをほざいている男も居る。筆者は、このような具体的な場を想定してみたが、作者の作意は、「お嫁さんにしたひとNo.1の女性」ということかも知れない。

秋思濃き男の像の瞑目よ 橋本京子

公園か美術館にある男性の彫像であろう。ブロンズ像か石像かは定かではないが、眼を閉じて物思いにふけっている姿なのである。本来作者が抱く秋思を、眼前の男性像に転化させたことが面白い。この像が何を考えているのか、作者も瞑目して季語「秋思」の本意に迫っている。

ふと胸をよぎる余生よ十三夜 越田栄子

ある年齢までは生きてきた人生を振り返ることが多いが、或る年齢に達するとそれまでとは逆の残された人生すなわち余生を考えるようになるのか。「ある年齢」は人によって差があると思うが、やはり淋しい。華やかな十五夜ではなく、十三夜の月だからこそ感傷をもたらすのであろう。

友垣と遊びし古墳草紅葉 村杉清吉

舞台はおそらくさきたま古墳群であろう。作者の子供の頃と今では、古墳の様子も様変わりしたはずで、現在の整備された状態とはほど遠く、より多くの古墳が自然のままの状態で散在していたようだ。子供の頃に思いを馳せて、草紅葉に彩られた古墳を巡る作者と連れ人の秋のひと日であった。

樟脳の香りほのかに秋深し 原田秀子

樟を原料とする樟脳と、コールドールや石油が原料となるナフタリンでは、防虫剤という用途は同じでも趣が異なる。樟脳には日本的な味わいが濃く、昔から和服の防虫剤として使われてきたので、子供の頃嗅いだ樟脳の匂いに母親を重ねている思いがする。外出した時の街中や電車の中など、樟脳の仄かな香りはなかなか佳いものである。

水琴窟

(水明集十一月号鑑賞)

池田雅夫

初秋やきりきりしやんと風生まる

菅原真理

「きりきりしやん」は副詞で、意味はきちんとしてかいがいいさま。本来は人の形容、修飾に用いられるのだが、本句は「風」を修飾している。「初秋」に対する驚きや期待感、そしてその人の容姿、表情までも容易に想像できる。

羅を光をまとふやうに着て

川田政代

「光をまとふやうに」の措辞に惹かれた。「羅」は薄絹を用いて作った単衣。きりりと身につけた羅は透けて涼しげである。「光のやうに」と例えると、またちがった趣きになる。あれこれと画策してみることが吟詠の醍醐味でもある。

蜘蛛の囿や遠くに白き長屋門

小林京子

武家屋敷であろうか。左右に長屋を構えたりっぱな門を背景として蜘蛛の巣がかかっている。閑静で情緒豊かな町であろう。遠近法で、小さく見える「長屋門」がまるで蜘蛛の囿に捕らえられているように見える。立体的映像が目に見えぬ。

蓼の花娘まかせの八十路かな

田中泰子

後期高齢に属する八十歳台。何やかやと世話してくれる頼りになる娘であるが、「娘まかせ」ばかりでは心の張りを失うと、自分に言いきかせている。「蓼の花」が効果的。

ぼんやりと父の喫煙夕端居

高原和子

縁先で一服つけて「ぼんやり」と庭を眺めている父。風呂あがりの夕刻、煙草の味も格別であろう。昨今の禁煙の風調も許されよ。一方、「ぼんやりと」を切り離すと、煙草を吸いながら「夕端居」している父の回想とも解釈できる。

水際に白き風あり秋に入る

新井のり子

古代中国の五行思想では、春は「青春」、夏は「朱夏」、秋は「白秋」、冬は「玄冬」として、これを人生に当てはめている。白秋は老年期で穏やかに人生の実りを楽しむ時期。「水際に白き風あり」の感性、「秋に入る」の選択が妙。

勝負なき鬪牛に沸く村の夏

阿部幸代

新潟県長岡市山古志地域周辺の「牛の角突き」の歴史は古く、千年前ともいわれている。牛が傷つく前に引き離し、引き分けとするのが習わしである。雪深い村の人々の娯楽の一つとして継承されている。鬪牛に沸く村人の歓声が聞こえる。

雷鳴を吸ひ込むやうな深き壺

古川拓真

アラジンの魔法のランプでも収めきれないような「雷鳴」を「吸ひ込むやうな深い壺」なのだ。お伽の世界に誘われた感じがする。さぞかし大きな壺であろうが、意外にも小さなものかも知れない。などと想像を掻きたてられる楽しい句。

秋めくや漂着物を拾ふ人

横山礼子

海水浴で賑わった浜も、やがて秋の気配で人影もまばら。潮の流れも変わり、漂着物が目につくようになった。目についた漂着物を拾いながら散歩をしているのだろう。静まり返った浜や潮の変化を敏感に受け止め、移ろう季を感じている。

手枕の軽き寝息や青簾

水野興二

襖をとり外し、また、窓などを開け放ったあとに目を遮るために用いる「青簾」。あるなしの風に吹かれながら転た寝をしているのだろう。「手枕の軽き寝息」に心地よさが伝わってくる。昼寝と言わず、「青簾」の魅力を引き出した。

別れ際のコロンの香りはや立秋

嶋田洋子

「別れ際」をどう解釈すればよいのだろう。通常ならば、出逢った時に「コロンの香り」に気づくはずである。それとなく秋用のコロンに変えたのだろうか。それは恋の終りとも。

いつの間に夜の湯殿に虫の楽

関谷多美子

露天風呂に限らず、家庭の風呂場でも虫の音は聞こえる。窓を少し空けて風を入れてみると、かすかな虫の音が聞こえた。次第に虫の音が大きくなってきた。暑い夏が終わり確実に季節が変わってゆく。その感慨に長湯となったことだろう。

長雨やにはかに秋に入る気配

田村福美

三十六歌仙の一人、藤原敏行の『秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる』を思い浮かべる。人それぞれに秋の気配を感じ取る。秋の長雨の音の変化に気づいたのかも知れない。具体化することで共感を得られる。

朝顔の代はるがはるに競ふ花

川島夕峰

未明から蕾がゆるみ、昼ごろには花が咲き終わってしまう朝顔。鮮やかな色あいは眩しいほど。「代はるがはる」は日ごとといったばいの花を咲かせるの意。まるで競い合うかのよう。その生命力に活力をいただき、一日の励みとしている。

信号を待つ間炎天曲飛行

藤間友二

東京オリンピックでのブルーインパルスの飛行は人々の注目の的となった。「炎天」の位置をあれこれ推敲し変えてみると、より印象的で円滑な流れの句になることもある。

網野月を 選

山紫集

秋深む心と体離れゆく

藤澤喜久

秋深し灯を消しひとり座す湯宿

木村るみ子

秋深し階下の少女黙礼す

村杉清吉

フルートの音色溶けゆき深む秋

熊倉千重子

秋深し未読の五冊積んでおく

横山礼子

屋根裏も隣もしづか秋深し

河野はるみ

秋深し米炊ぐ間のウォーキング

斎藤みよ

山の辺をかきこそ風の秋深し

越田栄子

綿くり機使はず捨てず秋深む

井上燈女

秋深し浜辺で拾ふ虚貝

後藤綾子

メモの数ふえて痴呆の秋深し

渋谷きいち

深川や三味線しやみの音微か秋深む

加藤でん治

引き波のあとのサンダル秋深し

近藤徹平

秋深し舞台の熱の冷めやらず

石川理恵

声上げてひとり泣きする秋深し

樋口元美

秋深む漆塗る刷毛固まりぬ

梅澤輝翠

以上特選

ばば様の歩みゆつくり秋深む	川島典虎	受話器よりA Iの声秋深し	鈴木玲子
一句成り推敲究め秋深し	河原叔子	夕星のトワイライトや秋深し	鈴木和子
病む友の電話の声や秋深し	川村 治	秋深し灯り連なる奈良井宿	諏訪サヨ子
秋さぶや心に灯す老いの詩	神田治江	乃木坂は深秋美術展閉幕	関谷多美子
放牧馬の潤ふ瞳秋深し	榊原聰子	秋深しコロナワクチン打ち終へて	瀬戸雄二郎
外出自粛化粧もせずの秋深む	佐々木典子	またひとつ増えし空家よ秋深む	染谷正信
柿の木に残る梯子や秋深し	笹本啓子	ひよろりと伸びたる孤影や秋深し	反町 修
秋深し少年の顔ふと翳る	下川光子	雨宿りしたる四阿秋深し	高島寛治
秋深し老醜ゆるり染み入りて	菅原卓郎	秋深む連日はげし寒暖差	高橋満耶子
秋深し土塀回らす古利かな	菅原真理	秋深し日暮れに追はれ買出しす	武田重子
秋深し車窓ミレーの絵の動画	杉浦理恵	屋根葺きを終へれば日暮秋深し	田中章嘉
夜泣きする隣家の赤子秋深し	鈴木藻好	朝倉の古井は浅し秋深し	鳥羽和風

秋深し真つ赤な服を買うて見る

飛永 鼓

秋深しゆるき流れに鳥四五羽

福田千春

川船の滯の光や秋深し

外村紀子

秋深し鎮守賑はず竹箒

保坂翔太

ラジオより小三治の声秋深む

仲田利子

秋深し解れし注連を張る古木

曲淵徹雄

秋深し夫の元気に驚嘆す

南條きわゑ

悲喜劇の背中合はせや秋深む

正木萬蝶

秋深し医者へ行くにもお洒落して

西浦千枝子

女一人気丈に生きて秋更くる

町野広子

秋深し旅の終はりの時刻表

西幅公子

秋深しシヨパンが坐る夫の椅子

松井由紀子

秋深し人恋ひしがる犬の肌

野口和子

マネキンは季節先取り秋闌くる

丸山マシミ

サンドアートに一瞬の夢秋深し

野田静香

小夜曲のポリウム下げて秋深し

宮崎紫水

玄関の軋む引戸や秋深し

野村美子

夜上がりの星皓皓と秋深し

宮崎チアキ

秋深し太鼓奏者の良き姿

橋本京子

首埋むる紅鶴の池秋深し

本橋稀香

秋深しボージョレ・ヌーヴォ刻をまつ

原田秀子

秋深し弥勒菩薩をまじまじと

森 和子

鑿を打つ音の乾きや秋深む

日高道を

秋さぶの湖紺青の鏡なす

森川義子

いろいろな鍋を楽しむ深秋かな	森下美智枝	秋深し朝しらじらと絹の色	荒井俱子
秋深し厩の前のジャズライブ	森本早苗	遺書いまだ書けずにやそぢ秋深む	飯田忠男
秋深し書き置きは唯ありがたう	山岸弘子	終電のホームに独り秋深し	井口俊晴
寺の鐘どこまで響く秋深し	山田美佐尾	喬木の骨格あらは秋深む	池田雅夫
遠くより呼ばれた気がして秋深し	山中いちい	秋深しハンカチ王子退場す	石田慶子
秋深し澄んだ音色でチエロ唄ふ	湯浅 和	町騒を遥かに峡の秋深し	井関礼子
秋深し山小屋鎖す槌の音	横山君夫	何処からか微かな香り秋深し	上戸千津子
秋深し人は互ひにもたれてる	青木鶴城	秋深し城子の住み処日暮れけり	宇田白鷺
秋深し山頂からのラブメール	新 曆文	回廊を巡り瞑想秋深し	内田恵子
秋深し眠りに入るやブナの白神	阿部幸代	老衰死てふ追憶の人秋深む	梅澤佐江
秋深し謝辞の貼り紙店仕舞ひ	安倍弘夫	父母の家の解体みとり秋深し	岡田宣子
秋深し県外ナンバーある隣	新井孝磨	秋深し目覚めの階段下りる音	岡野順子

秋深み絶景に立ちしどくら橋

大塚茂子

邂逅の夜話尽きず秋深し

大場順子

山紫集作品評 網野月を

兼題の「秋深し」は、何でも付いてしまう季語である。それだけに季語よりも重い句意となつている作品を中心に選句しました。人生の先輩であるお姉様お兄様にご教示いただきました事柄の多い兼題でした。

秋深む心と体は離れゆく 藤澤喜久

ここまで明確に心のあり方を叙述するのは稀でしょう。勿論、即物句ではないのですが、一生に一度はくらいはこういう句を作つてみたいと願っています。文字通り深みのある句意の中に感情の襞に触れるような質感が表現されているのです。句中に身体の一部を詠み込む技術は、繊細さを極めなければならぬのですが、見事に為し遂げています。気負いも何もない自然体で詠まれているからでしょう。秀句です。

秋深し階下の少女黙礼す 村杉清吉

目礼ではなくて「黙礼」なのです。少女との親しさの基準なのか、それとも階上と階下の空間的なディスタンスの位置関係なのかは読者の想像に任されているのです。この少女との関係性はどのようなものかを考えざるをえません。幼い時から見守つてきた少女の成長した姿に上五の季語「秋深し」を配合しているので、感慨を深めていると解釈することが出来るでしょう。主語「少女」が述語「黙礼す」るので、主語述語の叙述が句の中に物語を作り出しています。

秋深し未読の五冊積んでおく 横山礼子

朗読、味読、黙読、に並んで「ツン読」というのがあるでしょうね。本を開いてはいないのですが、そこに在るだけで、何となく本の中味が知れてしまうのです。作者本人は、折角購入した書籍を積み重ねておくだけで勿体無いと思つていないのでしょうか。読みきれない自分に三日坊主的な自戒の念を持つようにも感じるので、本よりも思索の秋を楽しんでいるようにも感じるので、上五の季語「秋深し」が、芳醇な時間に身を委ねる作者の姿を想像させます。

秋深し米炊ぐ間のウォーキング 斎藤みよ

中七の「……炊ぐ(かしぐ)……」の読みが上五の季語「秋深し」そのものように感じます。「炊く(たく)」ではないけないのです。そもそも稲という植物になった実である米を炊いで

飯にするのです。日本の米文化の象徴的な語彙がそこには展開されています。俳句はあくまでも韻文として起こったものですから、掲句のような訓読みの仕方では表現が深まったのです。

綿くり機使はず捨てず秋深む 井上燈女

上五の「綿くり機(綿繰機)」は昨今、見掛けなくなつたものです。昨今は機械(ギニングマシン)がすべてを処理してくれるからです。手摘みの実綿を二本のローラーからなる綿繰機にかけて綿毛と種子を分けるのです。そのような古風な綿繰機を想像してみました。中七の「使はず捨てず」に今までの人間の営みの凝縮が感じられます。

メモの数ふえて痴呆の秋深し 洪谷きいち

近い人の景なのか、自虐なのかは分かりません。ただこの境遇に至つた今を肯定しているように読めるのです。座五の季語「秋深し」の担保する句意は、深まった秋を受け容れて、むしろ楽しんでるように思われるのです。

引き波のあとのサンダル秋深し 近藤徹平

上五の「引き波」が肝でしょう。「寄せ波」ならば打ち上げたのでしようけれども、「引き波」は其処に残したという意味でしょう。初秋の「寄せ波」に対しての晩秋の「引き波」なのです。

秋深し舞台の熱の冷めやらす 石川理恵

観劇する者の熱なのか、演じる者の熱なのかは分かりません。終演後の頬を掠める晩秋の風の冷たさが熱を気付かせてくれています。

声上げてひとり泣きする秋深し 樋口元美

嘘のない赤裸々な表現の意図するところが正直な作者の心境です。上五中七の意味は「号泣」「慟哭」と一言で表現しても良いところですが、どちらも大声を上げて泣くことで、上五の「声上げて」の意味は「嗚咽」くらいに解釈した方が良いでしょう。この涙には悲しみだけではなく、悔しさが込められているように筆者には思われてならないのです。それは座五の季語「秋深し」にあります。季語の底辺に横たわる森閑とした静かさを作者は感じ取っています。つまり深秋の無韻の中に迂闊にも漏らしてしまった自らの「嗚咽」に驚いたのです。その驚きの中に更に秋が深まり行くのです。

秋深む漆塗る刷毛固まりぬ 梅澤輝翠

日本では養生搔きに拠つての採液が多いようです。採液した漆は幾つかの行程を経て塗る漆になるのですが、乾いて固定するにはかなり高い湿度を要するようです。そう考えると座五の「固まりぬ」には、特定の意味があると考えなければなりません。上五の季語「秋深む」は、人為の尽くされたことの意味を表現しているでしょう。

大村節代 選

鼓
笛
集

靄切りて駿馬疾風の今朝の冬
立冬の駿馬の蹄乾きたり
追切りの騎手は無色に今朝の冬

北山建治郎

はやばやと点る外灯冬めきぬ
マネキンのダークな服や冬めけり
五百羅漢の喜怒哀楽や落葉散る

笹本啓子

工房に素焼の乾く冬はじめ
歳時記に挟む一葉の小春かな
静かなる石のベンチへ散る紅葉

越田栄子

塵ぬぐひ囲炉裏開きや亥の日けふ
諍ひもなき老二人いろり端
波模様描きしておかし白き尉

原田秀子

竹の春香にさそはれて坐禅会
酉の市よけて裏道薄明り
犬駆けて落葉舞ひたる石畳

新井孝磨

蒼穹や紅葉を透きて深き谷
落葉松の天を染めたる冬日和
竹藪をほんのり灯す寒椿

反町 修

秋ともし子らと「ガリバー旅行記」を
谷もみぢ老舗旅館の利休箸
卓袱台を囲む三代栗ご飯

保坂翔太

本を閉づ眼鏡外して秋思かな
山茶花に触れてハミングする母子
時雨降る温泉に入る野猿かな

加藤でん治

神の留守常のごとくに道浄め
見上ぐれば十一月の昼の月
水面見つる「考える人」冬ころら

仲田利子

菰卷や三百年のいろは松
勘亭流の匂ふまねきや今朝の冬
黄葉や夫と歩きし御堂筋

高橋満耶子

冬めくや利休鼠のあさぼらけ
枯葉落つ明日の芽吹きを確かめて
俺の靴匂友が捜す忘年会

飯田忠男

断崖に張り付く民家赤カンナ
尺蠖の皿より這ひ出すバイキング
白南風や濁流うねる谷の底

田中泰子

晩秋の湖岸黄金のたつこ像
ミステリーを一気に読破冬うらら
枯葉舞ふ沼の片隅貸ボート

野村美子

冬晴にシャツもシートも輝けり
冬茜空の八分を染め尽くし
閉ぢてなほ網膜に在る寒の月

横山礼子

落葉踏み鎌倉古道超えにけり
参道を婚近き娘と冬紅葉
光あびまさに食べ頃つるし柿

森下美智枝

庭一面石露咲く朝吾子出立
立冬の富士は堂々孫潑刺
三日月に金星添ひて冬初め

関谷多美子

大根引き土に手をつき一呼吸
冬の月食ビーフシチューのできるまで
居心地のよきや赤々実万両

阿部幸代

小春日和や滾る茶釜の湯気霞
薄化粧薄紅差して花野原
夕陽背に銀の穂芒溶け込みぬ

河原叔子

秋の山熊出没の立看板
笹分けて進む急坂秋登山
硯岩眼下に見ゆる秋の湖

木村るみ子

☆

☆

鼓笛集作品評

大村節代

追切りの騎手は無色に今朝の冬

北山建治郎

三歳馬のサラブレットのクラシックレースは、皐月賞、日本ダービー、菊花賞の三大レースである。このレースの最後の菊花賞も十月に行われる。掲句の季語は立冬なので、三大ダービーではなく、普通に競馬場で行われているレースと思われる。そして追切りとは、レースの数日前に行なう調教の事だという。中七の「騎手は無色」により、馬に対峙する騎手の真剣な様子が伝わる。

はやばやと点る外灯冬めきぬ

笹本啓子

立冬から次第に日が短くなり、冬至には一年で一番日が短く、夜が長くなる。日暮れが早くて、早々暗くなると、寒さが一層身に沁みる。外灯がはやばやと点るの表現が、夕ぐれの早さ、冬になった実感を上手く表現している。

鼓笛集巻頭（十二月号）

私の好きな一句（自句自解）

綿貫ひさの

髪洗ふこれで「さよなら」今日のこと

私は嫌な事はその日限りとし、大切な事はメモして置く。抜き打ちの事には慌てるが、気を緩め穏やかに過ごしている。この句、上五と下五を入れ換えた方が良いのか、今も気になっています。俳句は本当に難しいですね。

工房に素焼の乾く冬はじめ

越田栄子

素焼とは、上薬をかける前の陶磁器で白焼とも言われる。窯出しされた素焼の鉢や壺等が、工房に並ぶ。はて、さて、これから、この素の器は、如何なる釉という化粧を施されて、旅立つのだろう。

句集喝采

近藤徹平

◆高橋将夫「命と心」

文学の森

著者略歴 昭和二十一年福井県生。平成四年岡井省二に師事、「槐」入会。同十三年「槐」主宰継承。『新巻』等六句集既刊。現代俳句協会理事。関西現代俳句協会副会長。

著者はあとがきに、俳句は先師の「精神の風景、存在の詩」を基本理念とし、簡明、深さと広がり、新鮮さとオリジナリティ等に留意して俳句曼陀羅の世界を展開してきたと記す。

核実験するのは男ひな祭
ジャンボ機を追ひ越して飛ぶつばくらめ
溶鉱炉からはとばしる昭和かな
箱庭の空に私の目玉あり
ロボットにさせる戦や晶子の忌
尺蠖の歩みに巡る月日かな

著者のオリジナリティの光る句に目が留まる。第一句、ひな祭りと核実験の取合せ。第二句、成層圏のジャンボ機と地上の燕との取合せ。第三句、昭和の戦後は製鉄技術発展の成果を惜しまず途上国へ供与し平和を齎した時代。第四句、成層圏から見る著者の郷土の風景か。第五句、いまや戦争は戦闘員がゲーム機感覚で行う時代になったとか。第六句を著者は帯に掲げ、さらに前句集刊行後を「命を見つめ、心を訪ね、日常をいとおし」んだ時期と記す。掲句はこの時期の俳句の日常を尺蠖の歩みに擬した本句集の標題を徴す句である。

◆古寺靖子「桜貝」

ほむぎ出版

著者略歴 昭和五年東京都中野区生。昭和十九年和歌山県へ疎開。平成五年大阪市城東区老人福祉センター俳句教室に入会。同十年名村早智子女史に師事。同十八年同女史の「玉梓」創刊の際に入会。

名村「玉梓」主宰は序に、城東区俳句教室の前任指導者が高齢で退任の際に指導を引継ぎ、その後受講者有志と「玉梓」を創設、創刊会員の著者に卒寿記念の句集刊行を奨めた由。

夫の影踏まずに生きて去年今年
文机の奥に仕舞ひし桜貝
流水を割つてひとすぢ日矢の帯
月山のふところ深く青田道
料峭の知床波の音ばかり
鰯雲度胸決め乗る盃船
ちんぐるまくすぐるやうに山の風
文化の日卒寿の今も向学心
河豚鍋や通天閣に灯の点り

第一句、夫君をひたすら支えた昭和一桁の生きざまか。第二句は亡き夫君と沖繩旅行時の想い出の品と名村主宰が序に解説する標題句。第三句の流水、第四句の月山、第五句の知床、第六句の佐渡の盃船はそれぞれ夫君との旅の想い出と序は推察する。第七句のちんぐるまは高峰の登山経験のない人は知らぬはずの季語。第八句、卒寿の向上心にひたすら脱帽。第九句は句会後の主宰を囲む会員親睦会を想像させる。

菊風句会

第一日（十一月二十九日）

石山かつ子

七月に行う筈だった水明夏行はコロナ対策の為に行えず十一月二十九日、三十日に。二代目主宰 長谷川秋子先生の句集「菊風ぎ」に因んで「菊風句会」と命名して行われた。小春日のおだやかなお天気の中三十四名の参加。一番に出席の小林京子さんが席題を引き「初冬」と詠込「寄」で三句に決定。互選は五句。雪欄十句、主宰は多選。句会では、青木鶴城氏が進行役、披講を保坂翔太、曲淵徹雄両氏、そして点盛は大村節代、石井喜恵、岡田宣子の三氏と石山かつ子が担当した。

主宰詠

寄宿舎に空室多しからつ風
祇園の名妓初冬の路地をつつましく

師走名画座「寄らば斬るぞ」の名台詞

主宰選

膝寄せて心も寄せておでん鍋
シリウスはわが願ひ星冬初め
寄する波水鳥達の輪を揺する
初冬の光零して三輪車
はつ冬や喪中はがきの字の滲み
三線の一絞縮むる浅き冬
読みさしの寂聴源氏冬はじめ
初冬や鎮守の狛の尾に力
流れ寄る軽石に椰子冬の海
花終言葉にならず寄り添ひぬ
しぐるるやかつては此処に数寄屋橋
寄寓者は器用貧乏冬の蜂
空仰ぐ父の後ろ手冬はじめ
初冬や軒に強張る菜つ葉服
寄り掛かる膝も無き夜や卵酒
寄棟造の三百年や木の実降る
寄せ算に指の全てや冬うらら

指先を擦る仕草の冬初め
立ち寄りてすでに夕星暮早し
霜の夜の気炎いつしか左寄り

マスマ
〃
真理
〃
道を
節代
喜恵
徹雄
徹平
静香
正信
月を
由紀子
昇
はるみ
かつ子
〃
粉雪
稀香
延昭
以上特選

真打の蕎麦喰ふ仕草寄席の冬
 初冬や野良に漂ふ薄煙り
 寄切りの横綱相撲博多場所
 初冬や波紋広げつ鳥三つ
 冬浅し鬼女になりそな舞姿
 初冬や終の住処にある静寂
 寄合の話の弾むおでん鍋
 煤逃の尻を浮かせる寄席の椅子
 寄り竹の中の緑や冬はじめ
 冬茜二人の影の寄り添ひぬ
 鋭き声の礫と降るや冬初め
 買はずともボルシエの試乗冬初め
 豆を煮る音やはらかき冬初
 寄せ植ゑに星散りばめシクリスマス
 朝光の川面にやはき冬初め
 散策に立ち寄り買ふも万両を
 遅れ来るバス待つ朝や冬初め
 冬初め木に特大の鴉の巣
 冬初め銀杏並木の美事なり
 初冬のメタセコイアは金屏風
 健診の結果に安堵冬初め
 梵鐘の音吞み込みて冬初め
 メタセコイア燃えくつきりと初冬かな
 初冬の庭の草木は紅一点

徹平 風舎 小林京子 鶴城 節代 道恵 喜恵 徹雄 月を 宣子 マスミ 正信 順子 静香 チアキ 章嘉 橋本京子 公子 美智枝 真理 多美子 茂子 由紀子 修

初冬の浜に軽石襲来す
 相寄りて夢さまさまな浮寝鳥
 初冬の風の海辺で唄うてみる
 洗顔の水にしやきつと冬初め
 裏山の色変はりゆく冬はじめ
 ゆつくりと野を這ふ煙も冬はじめ

翔太 昇 輝翠 はるみ 久美子 かつ子

第二日（十一月三十日）

青木鶴城

温暖な好天に恵まれる中、二日目は二十九名の参加者となつた。席題は「熊手」と「編」の詠み込みの二題。歳時記を繙く人あり、天井を睨む人あり、熱気が籠つた。

二日目の主宰選は左記の通りで、主宰より特選句を中心に丁寧な講評を頂いた。

主宰詠

熊手ふんばつ女将と呼ばれ五十年
 日本の髪の三つ編み冬の朝
 思ひきり髪形を変へ西の市

主宰選

大熊手負ふ毘沙門天のやうな人
 姫熊手鯛は金魚に偽小判
 三八銃かつぎし爺の熊手かな

月を 延昭

讚美歌をジャズに編曲クリスマス
 同姓の多き村里お酉様
 空に希望の編隊飛行冬深し
 編席につまづく齡花八ツ手
 控へ目な熊手かかへて新婚者
 黒髪に金糸編み込む聖夜かな
 遠人の手編みセーター賜りぬ
 小上がりに熊手を待たせ手酌酒
 編上げのブーツの支度霜の夜
 雪国に生まれ来る子の帽子編む
 憎しみもちよつびり編んで冬帽子
 真夜中は江戸の賑はひ酉の市
 久々に家族が揃ひ酉の市
 炬燵酒のろけ話の前後編
 財布の紐少し緩めて一の酉
 亡き父の熊手に今も父の香す
 寄り道はかな女の句碑よ熊手市
 迷ひ込む花見小路や酉の市
 悪疫を躲す吉祥おかめ市
 オーボエの音に編隊を白鳥来
 熊手市抜け路地裏の閑かさよ
 セーターの赤い真心彼に編む
 新聞の編集終り冬銀河

翔太
 マスミ
 静香
 喜恵
 真理
 小林京子
 チアキ
 昇
 はるみ
 和城
 鶴城
 以上特選
 翔太
 昇
 はるみ
 久美子
 道を
 喜恵
 徹雄
 月を
 宣子
 俊晴
 チアキ

和やかなおかめ見下す酉の市
 遠き日の母の手編みのセーター着
 背丈より大きな熊手かつぐ人
 冬空の朱で編まるるや帰り道
 六地藏寺の庭先酉の市
 居酒屋の奥から見下ろす新熊手
 物見なれども打つ柏手や熊手市
 しゃんしゃんと夜空に響く酉の市
 後編に続く叙事詩よ小六月
 編み上げし項にふはと白シヨール
 不景気を根刮ぎ払ひ大熊手
 抜きん出ておかめ小判の熊手ゆく
 「レモン」の編曲流るるスキー場
 よどみなき香具師の口上酉の市
 下町の商家に生まれ酉の市
 編纂の防災地図や冬の虹
 おほかたは齡のせむに熊手買ふ

章嘉
 公子
 美智枝
 真理
 茂子
 和
 小林京子
 修
 節代
 マスミ
 正信
 順子
 静香
 稀香
 延昭
 かつ子
 鶴城

コロナ禍により中止を余儀なくされた夏行の代替として開催された「菊風句会」は盛会の内に二日間の句会を終えた。一日目及び二日目の計、一八三句の中より三極（天・地・人）と超特選句が公表され、主宰句の色紙と短冊が授与された。

天

黒髪に金糸編み込む聖夜かな

地

シリウスはわが願ひ星冬初め

人

大熊手負ふ毘沙門天のやうな人

小林京子

マシミ

月を

超特選

寄棟造の三百年や木の実降る

三線の一弦締むる浅き冬

しぐるるやかつては此処に数寄屋橋

編席につまづく齡花八ツ手

控へ目な熊手かかへて新婚者

雪国に生まれ来る子の帽子編む

真夜中は江戸の賑はひ酉の市

かつ子

節代

正信

喜恵

真理

和城

その他二日間を通じての主宰選高得点者七名にも主宰句の短冊が授与された。

一位

丸山マシミ

二位

網野月を

三位

菅原真理

石山かつ子

四位

小林京子

青木鶴城

石井喜恵

俳句

2月号 予告

1月25日発売
予価1,040円(本体945円)⑩

特別作品—宮坂静生・山尾玉藻・伊藤伊那男

約40結社、期待の俳人！

大特集

結社賞 受賞者競詠

特集

人生後半の俳句

中村和弘

▼総論 加齢と実作……………
芭蕉の晩年／晩年の秀句「昭和編、平成・令和編」／
現代の「人生後半」の秀句

日本の俳人100………
森田純一郎『旅懐』

付録 季寄せを兼ねた
俳句手帖春

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

水明例会

第一例会（浦和）

境延昭報
茂木和子

アフリカに続く冬空麒麟舐む
潔く布団抜け出す主婦の朝
背に腹や亡妻の蒲団を叩き干す
一課二課課長舎宅の干蒲団
冬茜キリン親子のシルエツト
人探すヘリコプターや布団乾す
寝入り端鳥の気分や干蒲団

稀香
光弥
延昭
チアキ
喜恵
和子
——以上特選

順子
稀香
治子
和葉
チアキ
マスミ
徹平

継ぎ接ぎの布団を棄てて国すつる
予後良きやほど良く軽き羽毛布団
マフラーをキリンに貸すと子は泣きぬ
望郷や小春の園にキリンの首
下手な絵もキリンは麒麟冬日和
照る山を前景にして蒲団干す

節代
喜恵
理恵
光弥
延昭
和子

第二例会（東京本所）

山中みどり
太田絹映

今日を早昨日に加へ十日菊
風強しグラタンの牡蠣ぶつくりと
加速する新幹線や雁渡し
三陸の苦節十年牡蠣太し
加速度を付けて時過ぐ暮の秋
七色をふた振り加へ蕪汁

竺仙
いちい
峰雄
鶴城
鶴城
——以上特選

竺仙
鶴城

第三例会（東京）

五明
曲淵徹雄
昇報

遠富士を手に載せてみる豊の秋
野草を子ら駆けめぐり草は実に
草の実にまみれ初恋叶ひけり
草の実の精一杯の主張かな
草の実は勲章子らの探検記
草の実や一本道を一步逸れ
花むかし栄華の十三湊
鬼無里なる口伝の郷や草は実に

康世
萬蝶
岡野順子
理恵
徹雄
昇

——以上特選



日溜りに手触り温き糸のこ草
鎌倉は秋苦勞話を競ひ行く

三艘がならび白波秋の晴

草の実飛ぶ辻の地藏のみな笑まひ

大場順子

実をつけて手をつなぎ合ふ穂草かな

岡野順子

紺碧の空や綿虫ほしいまま

看護師の言葉簡潔雁渡し
草の実飛ぶ鼻梁の欠けし磨崖仏

雅夫
康世
萬蝶

第四例会 (浦和)

境延昭
石井喜恵報

朝寒に揉み手忙しき青物屋

野猪盛ん籠城沙汰の峽の村

犯人は無人カメラに猪通る

雑巾を絞る小坊主朝寒し

里山の返す笈や猪撃たる

朝寒やリード緩めて走り出す

朝寒を攪拌したる登校児

組板の水の奔りや朝寒し

猪狩りや猟銃手入れ丹念に

猛進の猪広げし傘に怯みけり

猪を追ふ勢子衆の声草を這ふ

朝寒や息を静かに太極拳

鏡の中の見知らぬ私朝寒し

喜久

理恵

徹雄

順子

雅夫

康世

昇

昇

昇

光

光

光

光

光

光

光

光

光

光

光

光

光

光

猪と聞いてウエルダンジビエの店
朝寒し夜勤帰りの我が子待つ

朝寒の息はづませて登校児

フクシマや「猪豚」盛る里となり

朝寒やために刻む千六本

朝寒やぶると動く渡し船

朝寒やかちりと外すドアチーン

延昭

寛治

順子

由紀子

昇

喜恵

若松例会 (京橋)

正木萬蝶
石田慶子報

浦和にも夜霧へ礼を言ふ奴が

法堂の燭のゆらめき冬隣

指の腹ふやかす長湯冬隣

編み上りまで待つやこの恋冬隣

駅そばの湯気とだしの香冬隣

冬隣窓映り合ふ西洋館

透けにくき黒子の頭巾冬隣

じやんけんで登る階段秋夕焼

其処此処にとんかち聞こゆ冬近し

レシビ付き母の小包冬隣

冬ざれて外れ馬券が宙に舞ふ

沈黙流れ外方向く君木の実降る

外堀を埋めるやうに枯蓮

煎餅の手焼体験冬隣

鎮魂の独り吟行照紅葉

外つ国のもろもろ背負ひ鳥渡る

ジャムは皆食べてしまつた冬隣

緑ありて嫁ぐ雪國冬隣

秋蘭くや鬼女の宴に紛れ込む

城濠の水きらめかせ鴨むるる

城濠の水きらめかせ鴨むるる

月を

マスミ

千春

理恵

鳥声に木霊のあそぶ黄落谿
神の留守燈の半ばで休む駕籠
山黄葉天狗の面に醬の香
なかなか難しきかな木の実独楽
黄葉の樹々の名知らず鹿煎餅
逝く秋や白いテラスの弾き語り

玲子
道子
ゆら女
千津子
和子
早苗

盆景に溪の声聴く菊花展
朽舟へ寄す渚波星月夜
冬紅葉季の移ろひの確かなる
黄葉の風を笛とし舞ひはじむ
御旅所に風吹き抜けて神の留守
通草ふたつこまでおいでと笑ひをり
黄葉散る瓦斯灯のこる煉瓦道
銀杏黄葉帰路には重き旅靴
紅葉前線高野の峯を駆け抜ける
孤巻さや三百年のいろは松
黄葉や白壁続くわが母校

以上特選
早苗
玲子
千津子
ゆら女
洋子
和子
道子
千枝子
満耶子
さわゑ

昔話あれこれ11

仁徳天皇の国見の物語

いよいよ、『古事記』の下巻に入る。

第十六代仁徳天皇は、即位後のある時

高い山から四方を見渡し、「どの村からも煙が立っていない。民の生活は苦しいのだろう。三年間租税や兵役を課するのを止めよう。」と言って租税・兵役を課さなかった。そのため、宮殿は荒れ雨漏りもしたが、雨漏りのない所に居場所を移したり、雨漏りを桶で受けたりしてのしだ。やがて国中に煙が立つようになり、民は豊かになったようだと思われ、課したが、民は苦しむことがなかった。人々は聖の御代と称えた。

皇后の嫉妬に悩まされる天皇

天皇は子孫繁栄のため、多くの妃を持つことが当然という時代であったが、仁徳天皇の皇后・石之日売は特別に嫉妬深い人だった。天皇付きの女官たちが、天皇に親し気な物言いをすると、皇后は地団太を踏んで怒り狂った。

吉備の国の黒日売が容姿端麗と聞き、天皇はそばに召そうとしたが、黒日売は皇后の嫉妬を恐れて故郷に逃げ帰ってしまった。吉備の国に帰る黒日売の船を見て天皇の詠んだ歌は

沖へには 小船連ららく
くろざやの まさつこ我妹
国へ下らす

(沖には小船が連なっているが

愛しいわが妹は国に帰ってしま
うのか)

この歌を聞いた皇后は大層怒り、黒日売を船から降ろして徒歩で国まで帰るよう命令した。

それでも天皇は黒日売が恋しくて、皇后を騙して「淡道嶋を視察してくる」と言っ
て吉備の国に出掛けた。黒日売は欲待
して山畑の青菜を摘んで吸い物を作って
差し上げようと天皇を青菜摘みにお誘い
した。

そこで天皇は歌を歌った。

山がたに 蒔ける菘菜も
吉備人と 共にし摘めば
楽しくもあるか

(山畑に蒔いた青菜も吉備の乙女
と摘めば、なんと楽しいことよ)

天皇が都に戻る時、姫は
倭方に 西風吹きあげて
雲離れ 退き居りとも
われ忘れぬや

(貴方の帰って行かれる大和の方
に西風が吹き、雲が離れて行
く。そのように別れてしまっ
ても、私は貴方のことを忘れませ
んわ)

(つづく 丸山マズミ)

各地句会



新樹の会 (浦和)

格別の尼僧の笑顔紅葉散る
紅葉散る出世稲荷の油揚げ
谷川の赤き水面や散紅葉
山門の仁王が睨む散紅葉
紅葉散る血縁日々に薄くなり
散紅葉修験の法螺の符する
ぼつくりと信玄袋七五三

櫻蔭句会 (浦和)

自販機に炎のマーク冬に入る
湯の街に下駄音響く今朝の冬
夕影の山茶花の紅零れつぐ
山茶花やおかつば跳ぬるけんけんば
立冬の陽のやはらかに一年忌
今朝の風山茶花の紅さらひたり
山茶花や紅一点の町工場

道子 京子 修
清吉 平通 徹雄 鶴城
美智枝 茂子 多美子 公子 由紀子 真理 幸代

山茶花や酒の肴の恋の唄
山茶花の散り敷く道をひとり行く
山茶花が静かに見守る通学路
野菊の会 (与野)
朝寒し舌つ足らずの会話して
象の背で遊ぶ雀や小春空
秋刀魚焼きひとりの夕餉ジャズ流れ
路地に聞く下町言葉花八手
水明小川句会 (小川)

山の路辿りたどりて冬桜
コスモスも咲いて棚田は賑はへり
冬帽子色は褪せてもお気に入り
足早に暮るる山の端冬桜
柿の木塾 (浦和)
空魚籠を提げて目深に冬帽子
股下より赤城峯を見て大根引き
磨かれて裸身隈なき浜大根
産土に入りて冬帽阿弥陀にす
幼児の目深くかぶる冬帽子
大根洗ふ隣に小さな乳母車
別れぐせのこの冬帽はしまひ置く
冬帽を膝に機内の父正座
被はれてゐる脳回路冬帽子

美子 千恵 道子
綾子 きよ子 みや 栄子
光子 清子 和子 美代子
和子 清子 光子

りそな俳句会 (浦和)
山に落つる夕日と競ふ冬紅葉
鶺鴒の中割つて駿馬や今朝の冬
ゆらゆらと湯船色めく冬紅葉
抱へたる犬の体温冬來たる
山峡に柚小屋ありて今朝の冬
なげなしの陽を存分に冬紅葉
冬紅葉雨情生家に津波跡
結願の寺への磴や冬紅葉

雛の会 (浦和)
脱ぎ捨てしセーターへ猫もぐりこむ
返り花まだまだ使ふパスポート
喉までのことばたたみて帰り花
雨天決行赤いセーター選びけり
冬帽を左目深に洒落てみる
好日の予感朝の帰り花
あゆみの会 (浦和)
新刊の帯紙外す文化の日
文化の日骨董市に黒電話
文化の日下北沢の芝居観る
文化の日高き増し行く漫画本
艶やかな女形見返る文化の日
傘寿まで一日一書文化の日

暦文 建治郎 京子 久美子 道夫 雅夫 寛治 マスミ
燈女 喜恵 輝翠 チアキ 佐江 政代
朋子 圭子 重子 山遊 藻和 好

椽林句会 (大宮)

金管の音色高らか冬銀河
入日いま水尾引く鴛鴦は光源に
冬銀河シャノン低く唄ひけり
貝塚の貝累累と冬銀河

光子
光子
光子
光代
美佐尾

文化の日子ら口ずさむみずの詩
俳道の開花はいつや秋の雲
赤子見てただただ嬉し文化の日
太鼓の音夜祭近し山粧ふ
包丁も住まひも嘗て文化の日
新刊の帯の処遇や文化の日
門柱の国旗に日照る文化の日

風舎
粉雪
悦子
孝男
月を
鶴城
京子

五十鈴川水ひんやりと神の旅
神の旅貧乏神は居据れり
小春日や母の面影夢の中
寂聴の慈愛全てや神の旅
野良猫のヨガのポーズや庭小春
小春日や米寿の姉を祝ふごと
酒沼と川は海へと神の旅

かつ子
俱枝
和枝
タイ
啓子
喜代子
和子

山茶花 (浦和)

道ならぬ恋の神話や夜長の灯
「歎異抄」斜め読みする夜長かな
夜もすがら何を語るかちちる虫
長き夜父のあぐらの心地よさ
凡庸に暮す毎日夜の長し

マスマ
泰子
美江子
光子
綾子

光が丘俳句教室 (東京)
凧に吹き上げられし昼の月
初物の小振りのみかんお手玉に
食卓のいつでもみかんある景色
灯を消してより木枯の唸り立つ
剥き方に母のこだはり蜜柑食ふ

竜也
康子
はる
守伊
理恵

和歌山水明句会 (和歌山)
綿虫や漂ふやうなわが歩み
庭仕事小春のひと日使ひ切る
微笑みし露座仏粧ふ照紅葉
冬満月の大き光をとくと浴ぶ
山茶花や母の遺せし裁縫箱
黄葉や黒きマスクに手を振らる
脇役にするには惜しき旬白菜
カンツォーネと焼肉しみる秋の芝

和子
道子
千枝子
千世子
満耶子
さわゑ
洋子
廼代

水明熊谷句会 (熊谷)

編棒の先が対話の文化の日
裏窓に星の煌めき霜の声
文化の日平積みゴルゴサティーン
霜柱踏みし小麦も強くなり
晴れやかに裾野ひく富士文化の日
ソリストの愛しき笑顔文化の日
無器用に生きて文化の日の静か
AIを負かす若者文化の日

治江
栄子
徹平
正行
和子
秀子
燈女
茂子

芽吹句会 (浦和)
新生児室窓に小春の日が覗く
しぐるるや嵯峨野路急ぐ人力車
ほの匂ふ新の障子や割烹着
しぐれ来てうつつすら煙る北山杉
人心を得がたき降嫁冬椿
新鋭の介護ロボット文化の日
村時雨街道をゆくチンドン屋
きざきサークル (浦和)

千重子
玲子
修
富子
ひろこ
チアキ
道を

野ばらの会 (浦和)
そこかしこリモート会議神無月
御社の木々を刈り込み神無月
弁天のみはりてあたり神無月
黒髪に戻す娘や神無月
神無月色付けを待つ白達磨
窓は額縁雨にそよぐ葉神無月
石路の花犬連れ立ちて町探検

栄子
茂子
治江
夏江
秀子
和子
みき子

蘭の会 (浦和)

境内の古池覗く文化の日

トエ

上州の風弱めよ弱め神の旅

光子

ミモザの会 (横浜)

茶の花や踊り口より始まれり
段々畑健気に咲くは茶の花か
登下校茶の花の咲く小径かな
蒲団干す一人増えたかうさぎ柄
練切の淡き色もて茶のひらく
偲びつつ帰る豊の道お茶の花

亜弥子
栄子
史代
慶子
萬蝶
千春

円卓の会 (浦和)

いにしへの風を呼ぶ句碑紅葉散る
紅葉かつ散る秩父にくるくる子らもくる
屋代より祝詞朗朗七五三
鳥居なきつきの宮さま木の葉散る
玉砂利を踏むぼつくりや七五三祝ふ
四世代揃ひ踏みなる七五三

静香
輝翠
道を
翔太
月を
鶴城

若鮎句会 (浦和)

筋ひとつ違へて西の市の綺羅
木枯や母乳飲ます部屋静謐
凧や真白き紙垂の千切れをり
枯草や在るがままなるよき姿
柿落葉掃きてまた掃く在りし母
凧や沙翁の悲劇に寄る心
甘柿のあるが如しと鳥群れる
凧や新硬貨入れ缶コーヒー

稀香
さなえ
亮一
拓真
夕峰
芳春
香音子
順

西の町チエロの流るる喫茶店
木枯や行方を探す七十七年
冬めくやマグカップ置く駐在所
西の市一杯機嫌の締め声
鶴川山百合句会 (町田)

万美
月を
鶴城
喜夫

冬晴や半熟卵の黄身旨し
忘れ里猫が寝転ぶ刈田かな
冬晴や大樹の影を赤く染め
小春日や二駅歩き万歩計
小春日の埃たたきて一番風呂

静香
孝磨
久子
暦文
きいち

失せにけり失せにけえりと霧中へ
秋蝶や恋慕の舞の白拍子
余力あらば故郷の墓へ秋の蝶
橋渡れば生家あるはず霧深し
秋蝶の即かず離れず野辺送り
霧晴れぬ中を山岳博物館
何をした逃げる真黒き秋の蝶
霧動き車体揺らしてバス来る
水明松本句会 (松本)

喜久
史代
千春
萬蝶
理恵
美千子
広子

日記には善き事のみを寒鼻
枇杷の花北限の地に香りあり
枇杷の花潮風を吸ひ留めたり
談合か厚き葉陰の枇杷の花
残照の海静かなり枇杷の花
改札に友の笑顔や初時雨
冬の虹けふの入日の独り言
差しつ差されつしんねこ話初時雨
待ち人の来ない休日初時雨
初時雨公衆電話に人の影

礼子
さち子
風舎
ひさの
朝香
るみ子
元美
月を
鶴城
宣子

色を増し里へ里へと紅葉する
ハロウィン仮装禁止の動物園
焼芋をほほばる母の笑顔かな
琴唄をふと口ずさむ十三夜
阜月の会 (浦和)

陽子
マリス
玲子
寿子

親子の座ワイングラスにおでん鍋
枯葉鳴る座持の上手き人と会ふ
戻りなき友の旅立ち帰り花
口ずさむ第九の歡喜返り花
常の座の正面に見る冬の月
定位置に母座す奇跡今朝の秋

正子
道子
税子
ともこ
美子

セーターの袖口光る十歳児
冬晴や見覚えあれど遠会秋
冬晴のひと日選んで六本木
冬晴を背に政談の尽きにけり

美佐尾
珪子
順子
紀子

冬晴や半熟卵の黄身旨し
忘れ里猫が寝転ぶ刈田かな
冬晴や大樹の影を赤く染め
小春日や二駅歩き万歩計
小春日の埃たたきて一番風呂

静香
孝磨
久子
暦文
きいち

たかなな俳句会 (川口)

冬うらら三毛猫の尾がゆらりゆら
無住寺の落葉や清く掃かれたり
冬日和孫の歩巾を追ひかける
捜しをる傷なき落葉まだ二枚
落葉踏むふとんの様な我が狹庭
小夜更けて落葉の音を聴く櫛
立食の受賞パーティー冬薔薇
遠投の浮子の波紋や冬麗
新しき落葉とともに山育つ
本音語らず逝きし人落葉雨

久美子
のり子
福美
小麦
勢津子
和子
鶴城
水尾
静香

葦を焼く音は夜半か神の旅
手水とる柄杓に揺るる冬紅葉
神立ちや出雲へつづく赤い糸
方丈に旧りし扇額冬紅葉
滝の音細くなりたり冬紅葉
神立ちて半分閉ざす勅使門
神の旅飼葉を漁る老神馬
日溜りに終の華や冬紅葉
コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

典子
卓郎
正信
寛治
利子
治子
徹雄
順子

酒蔵に息づく酵母星冴ゆる
菊枯るる入り日の残す峰いくつ
枯菊に紛らせて焚く文の束
音無しの構への剣や月冴ゆる
石畳冴ゆ教会を出でてより
菊枯るる彼の音胡弓か空耳か
水明鬼石句会 (鬼石)

マスマ
水尾
昇
恵子
史代
節代

花衣の会 (浦和)

透明になりて味浸む大根かな
大根引く三浦台地は赤い土
野仏はしづかにおはし大根干す
大根干し「へ」の字になりて取り込みり
干し大根に物干竿を明け渡す

みよ
みち
峯雄
治
章嘉

石段に猫の寄合神の留守
交番に人の影なき神の留守
木枯に飛び去る鴉ビルの上
継ぎ当てるズボンの記憶空つ風
すは夜盗風奔る日本橋

早都子
千恵子
淑子
正信
昇

鯛焼きの勢ぞろひして冬ぬくし
足早に過ぎたる今年はや立冬
読書して冬暖かな陽射しあび
冬暖か足の向くまま飛鳥山
冬めくや朝の浅草活気付く
冬ぬくしベンチ陣取る番鳩
冬の早朝鳥の飛翔に活気づく
せみ塚のうすき字に触れ冬ぬくし
枯葉降りつるの佻しさ吾が顔に
すずかけの枯葉纏うて君に逢ふ

政代
美紗子
真理
美智枝
美子

りんどう俳句会 (浦和)

夕映えの稲佐の浜や神の旅
神の旅沖に兎のあまた跳び
神風に乗りにて出立神の旅
はらり散る日当りの枝の冬紅葉
輝割れし阿吽の相に冬紅葉

紀子
君夫
翔太
弘夫
サヨ子

珊瑚の会 (浦和)
枯れすすむ菊に矜恃の香と色と
箱のまま片す金盃菊枯るる
冴ゆる夜やワイングラスの触るる音
道行の菊人形も枯れ初むる
冴ゆる夜の音を絞つて聴くシヨパン

和子
広子
和葉
かつ子
喜恵

青葉の会 (浦和)
冬桜若木の精気溢れ咲く
どうだんつじ赤く染まりて鬼城句碑
風静かすすきの束をながめ来る
冬桜おごらず咲きて人どつと
道添のたわわに実るみかん園

和子
聡子
ナヲ子
紀子
洋子

神戸大池句会（神戸）

明石ダコ鯛も装ふ菊花展

しみじみと集大成の枯葉なる

辻地藏霜融けゆきて涙めく

初冬のジャズストリート暮れなづむ

標の会（浦和）

立ち上がるおでんの湯気に笑顔あり

木枯しが木枯しを追ひ街の中

おでん鍋人柄出たる箸捌き

木枯しや木曾の柚山ゆるがせり

木枯しや「風天とら」の大きくしやみ

べつこう色愛でつ手酌のおでんかな

木枯やシヨパンのエチユード遠き日よ

三日目のおでんに飽きるひとりかな

木枯や女学生らの声さらふ

おでん屋のにはひ街角あたたためて

木枯や女よろける昼の月

俳句の手ほどき（岩槻）

枯葉降る陽の斑のゆるる石畳

詩を凝らす破調もよけれ一茶の忌

したためし文また破り小夜時雨

遙か来て枯葉踏む音にもてなされ

神木の走り根太し枯葉舞ふ

早苗

礼子

千津子

玲子

妙子

朋子

裕誌

彰二

克之

富子

文子

富美子

千重子

敦子

治子

治子

延昭

倭子

佐江

ます美

水尾

枯葉舞ふ四辻の風が尖りけり
枯葉飛ぶ忠治破りし閑所跡

破線どほりに切れぬ鎌や雪催

紙破る吾子の遊びや冬うらら

小春日に破れ帽子の寮歌祭

障子戸の破れ繕ふ葉影かな

けつまづき破顔一笑小春空

枯葉舞ひ落ちゆく先の涼

裏山の枯葉は乱舞風のまま

枯葉舞ひ鳥屋の孔雀が昂りぬ

☆

☆

義子

徹平

翔太

美子

卓郎

幸代

忠男

桂子

久美子

かつ子

通信指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信指導を実施しています。希望者は、左記により作品を送って下さい。

主宰 山本鬼之介

記

〔指導者〕境 延昭

〔作品〕七句 〔受講料〕千円

〔方法〕①用紙自由②住所・氏名・

電話番号を明記③84円切手同封

④返信用封筒は不要⑤締切は随時

〔送付先〕境 延昭

〒三三七―〇〇四―さいたま市

見沼区南中丸一―一―四一

電話 〇四八―六八六―二二八一

新春俳句大会のお知らせ

- [日 時] 2022年1月25日(火) 12時00分受付 12時45分開会
[会 場] 浦和駅東口 浦和パルコ10階 第13集会室
[投句締切] 「初東風」「仏の座」各1句 計2句 12時締切
[会 費] 1,000円(飲み物は各自で持参してください)
[申し込み] 1月5日より受け付け開始。17日(月)までに会費を添えて発行所総務部宛。

※会場はコロナ感染症対策のため申し込み無しの方の入場は出来ません。

※なお、状況に拠っては、内容を変更する場合がございます。

事業部

水明忌のご案内

- [日 時] 2022年2月26日(土) 12時00分受付 12時30分開会
[会 場] 浦和駅東口 浦和パルコ10階 第13集会室
[投句締切] 「鶯」、「当季雑詠」各1句 計2句
※受付時にお投句下さい。
[参加費] 1,000円(飲み物は各自で持参してください)
※コロナの時節柄、懇親会は行いません。
[申し込み] 2月1日(火)より受け付け開始。18日(金)までに会費を添えて発行所総務部宛。

※会場はコロナ感染症対策のため申し込み無しの方の入場は出来ません

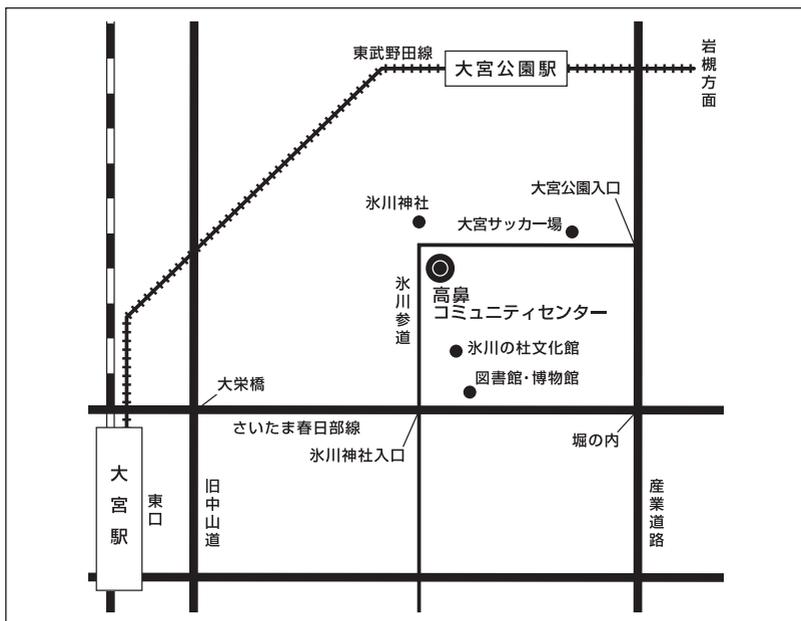
※なお、状況に拠っては、内容を変更する場合がございます

事業部

春の吟行会のご案内

- 【日時】** 令和4年3月26日(土)
- 【会場】** 高鼻コミュニティーセンター地下1階 大会議室（エレベーターなし）
埼玉県さいたま市大宮区高鼻町2-292-1
電話 048-644-3360 FAX 048-644-3361
- 【受付開始】** 10時
- 【投句締切】** 12時（当季囀目2句）
- 【開会】** 13時
- 【会費】** 1,000円（お弁当・お茶は各自で持参して下さい。）
*懇親会は行いません。
- 【申し込み】** 3月4日～16日まで。会費を添えて総務部宛にお申し込み下さい。
- 【吟行場所】** 大宮公園及び大宮公園周辺
*地図は受付の際、お渡しします。
- 【アクセス】** JR大宮駅（東口）より徒歩20分
バスは、運行本数がとても少ないため、お薦めできません。徒歩以外の方は、タクシーをお薦めいたします。
○大勢の方の参加をお待ちしております。

主担当「りんどう俳句会」支援「事業部」



風 声

○俳句四季十一月号——「季語を詠む」欄

くだら野や影の二人も手をつなぐ

鬼之介

○現代俳句十一月号——「特別作品」欄

「折折の」

舶来のワクチンを待つ山椒の芽

茂木和子

緑蔭や万能の手を見詰めぬる

花樗いつより夫は老友に

昼顔に晴れの渡りし引込線

花ミモザときどき海馬かすみけり

雁渡し形状記憶のネックレス

神木に鮮やかな尿秋の蟬

耳痒し遠くとほくの筑紫恋し

江戸城の石垣に文字秋黴入

寒夕焼名残りの端を歩きけり

○現代俳句十一月号——「現代俳句年鑑2021を読む」欄

押手諧遊氏の感銘十句抄に

うららかや平均台の脚線美

鬼之介

伊藤昇氏の感銘十句抄に

半眼は仏の境地日向ぼこ

水落守伊

岩月通子氏の感銘十句抄に

晩成と言はれ八十路や初鏡

水落守伊

○現代俳句十一月号——「現代俳句の風」欄

さやけしや打首めいて躡口

青木鶴城

山里にりんどう咲きて先師恋ふ

大塚茂子

新涼や草刈る女飾りなし

神田治江

手の皴の語る人生衣被

越田栄子

あなうれし案山子は母校の体育着

宮崎紫水

○ひいらぎ（小路智壽子主宰）十一月号——「現代俳句の鑑

賞」欄

岸本隆雄氏の鑑賞により

葉柳やそろそろ出番「お岩さま」

鬼之介

柳には幽霊が付き物。「お岩さま」は四谷怪談の主人公、

すでに妻がいながら金に目がくらみ、他の女性と結婚する

ことを決めてしまった伊右衛門とその妻であるお岩の物語。

伊右衛門は顔のただれる葉をお岩さんに盛り、お岩さんは

自分の顔を見て発狂し、誤って自分に刀を刺し死んでしま

う。死語も毎晩、旦那の伊右衛門の枕元にうらめしやと現

れるという怖い怪談。

○天塚（宮谷昌代主宰）十一月号——「珠玉一句」欄

供花は鬼灯天に召されし女兒の部屋

鬼之介

○くぢら（中尾公彦主宰）十一月号——「受贈俳誌美術館」欄

つまべにや肌身離さず守り札 鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）十一月号——「受贈誌拝見」欄

花柳の名取の一字秋裕 鬼之介

○好日（高橋健文主宰）十一月号——「受贈誌御礼」欄

脇付のゆかしき文やさくらんぼ 鬼之介

○新月（松田碧霞主宰）十一月号——「受贈俳誌紹介」欄

賓頭盧の火照り鎮むる秋扇 鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）十一月、十二月号——「他誌拝見」欄

賓頭盧の火照り鎮むる秋扇 鬼之介

○太陽（吉原文音主宰）十一月号——「受贈誌御礼」欄

花柳の名取の一字秋裕 鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）十一月号——「諸家近詠」欄

人に国籍船に船籍雁わたし 鬼之介

○山彦（河村正浩主宰）十一月号——「諸家近詠」欄

こだはりの真竹のしなふ星祭 鬼之介

○笏（山本一步主宰）十一月号——「受贈誌の一句」欄

牧場のサイロはるかに大夏野 横山君夫

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

—令和三年十一月三十一日現在—

星野和葉	10	口	日高道を	2	口
山本鬼之介	50	口	曲淵徹雄	2	口
岡田宣子	10	口	丸山マシミ	1	口
川崎益太郎	3	口	染谷正信	1	口
石井喜恵	10	口	宮崎チアキ	2	口
鳥羽和風	20	口	田中章嘉	2	口
由良ゆら女	20	口	大塚茂子	1	口
森 和子	3	口	反町 修	2	口
清水桂子	3	口	保坂翔太	1	口
正木萬蝶	30	口	河野はるみ	1	口
近藤徹平	10	口	大村節代	2	口
元田亮一	3	口	石山かつ子	2	口
島津初花	5	口	井口俊晴	2	口
石田慶子	10	口	大場順子	1	口
保坂翔太	5	口	西幅公子	1	口
川島典虎	3	口	森下美智枝	1	口
菊風句会			菅原真理	1	口
青木鶴城	2	口	—合計—	222	口—

令和4年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

- 応募資格** 季音同人を除く同人・誌友
- 応募句** 未発表作品：15句(表題を付す)
水明集・句会報等「水明」誌及び外部に
発表した作品は不可。
- 締切** 令和4年2月末日(発行所必着)
- 応募方法** 水明12月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員 (9名)

山本鬼之介	網野月を	大村節代
石山かつ子	石井喜恵	井口俊晴
保坂翔太	青木鶴城	日高道を

新珠賞推選委員 (5名)

宇田白鷺	大橋廸代	茂木和子
椎野美代子	波多野寿子	

II 水明掲示板 II

◆さいたま市浦和俳句連盟秋季文化祭俳句大会

兼題の部

さいたま商工会議所会頭賞 (3位) 森美枝子

さいたま市浦和俳句連盟会長賞 (5位) 大場順子

9位 五明 昇 19位 熊倉千重子

22位 越田栄子 25位 田中泰子

26位 佐藤克之

席題の部

埼玉 県 知 事 賞 (1位) 柚木治子

埼玉新聞社社長賞 (3位) 本橋稀香

埼玉県現代俳句協会会長賞 (5位) 日高道を

8位 星野和葉 10位 大塚茂子

19位 小山敦子 23位 熊倉千重子

29位 五明 昇

誤植訂正

十二月号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

○九頁上段

◇滯つくし (十月号)

正 意地悪く変質しそうな

誤 意地悪く変盾しそくな

最近の名句集を探る

座談会

遠藤由樹子「寝息と梟」

司会！筑紫磐井
大西 朋

津川絵理子「夜の水平線」

土肥あき子

堀田季何「人類の午後」

西村麒麟

※巻頭三句

小川軽舟

中原道夫

河原地英武

沖繩紀行32句

出口善子

※好評連載
藤枝リュウジ

古田紀一

575の散歩道
筑紫磐井

水内慶太

俳壇観測
坂口昌弘

柴田多鶴子

忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人

※今月の華
成田一子

句の手触り、俳人の響き
大西 朋

福田若之

俳句へのまなざし
神作研一

※俳句と短歌の10作競詠
村上鞆彦

手のひらの江戸
——古典籍を旅する
藤村公洋

花山周子

俳句のつまみ
二ノ宮一雄

※その時、俳句手帳
岩淵喜代子

一望百里

俳句四季
Haiku Shiki

2022年2月号

1月20日発売
定価1000円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市柴町2-22-28 ☎042-399-2180

水明の運営組織 (令和4年1月1日より)

主 宰 山本鬼之介

運営幹事長 網野月を

編集長 大村節代

常任運営幹事 網野月を 大村節代 石山かつ子 日高道を
青木鶴城 保坂翔太 石井喜恵 井口俊晴
曲淵徹雄

運営幹事 大橋廸代 宇田白鷺 椎野美代子

各 部

総務部 [会計、会員に関する管理事務、各行事の受付事務、水明誌等の発送、発行所管理ほか庶務全般]

部長・日高道を 石井喜恵 大場順子 菅原真理

事業部 [水明俳句会各行事の企画・運営・実行、地方支部会員との連携、新規会員拡充の企画・運営・実行、ホームページの企画・運営・実行、俳句教室の企画・運営・実行、会員研修の企画・運営・実行、広報活動の企画・運営・実行、渉外関係用務、編集企画]

部長・網野月を 副部長・青木鶴城
保坂翔太 曲淵徹雄 河野はるみ 反町 修
岡田宣子

編集部 [水明誌発行、全国大会資料の校正、水明誌の発送、その他編集関連用務]

部長 大村節代 石山かつ子 丸山マスマ
大塚茂子 野田静香

事務局 [常任運営幹事会の議案と議事録の作成]

局長 井口俊晴

監 事 [水明俳句会及び水明発展基金の会計監査]

山中みどり 新 暦文

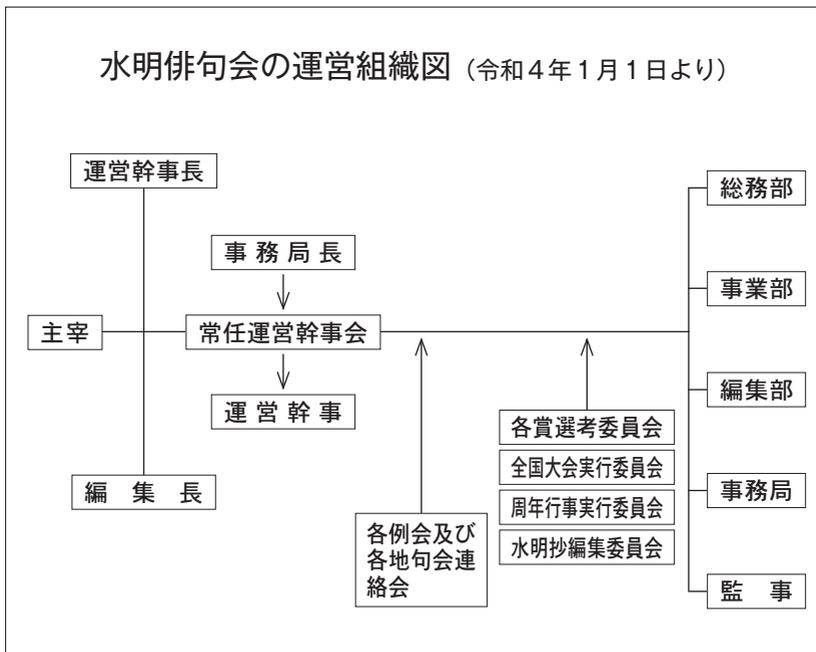
水明発展基金役員 (令和4年1月1日より)

会 長 山本鬼之介

幹 事 網野月を 大村節代 日高道を 石山かつ子
井口俊晴

監 事 山中みどり 新 暦文

水明俳句会の運営組織図（令和4年1月1日より）



水明俳句会各賞選考委員会（令和4年1月1日より）

水明賞				
主 宰	網野月を 井口俊晴	大村節代 日高道を	石山かつ子 青木鶴城	石井喜恵
季音賞				
主 宰	網野月を 井口俊晴	大村節代	石山かつ子	石井喜恵
かな女賞				
主 宰 [運営幹事長と編集長の同意を得る]				
新珠賞				
主 宰	網野月を 井口俊晴	大村節代 保坂翔太	石山かつ子 日高道を	石井喜恵 青木鶴城
推選委員：大橋 勉代 宇田 白鷺 椎野美代子 波多野寿子 茂木 和子				
鼓笛賞				
大村節代 [主宰と運営幹事長の同意を得る]				
山紫賞				
網野月を [主宰と編集長の同意を得る]				

令和4年主要年間行事等予定表

令和4年1月1日

行事名	日程	誌上案内	開催場所等	主担当	支援
新春俳句大会	1月25日(火) 12時	12月・1月号	浦和パルコ10階 第13集会室	事業部	
例会・句会 指導者および 幹事の会	1月25日(火) 10時		浦和パルコ10階 第13集会室	常任運営 幹事会	
水明忌	2月26日(土) 12時	1月・2月号	浦和パルコ10階 第13集会室	事業部	
春の吟行会	3月26日(土) 10時	1月・2月・ 3月号	高鼻 CC 大会議室	りんどう 俳句会	事業部
全国大会・ 創刊90周年 記念祝賀会	7月6日(水)	3月・4月・ 5月号	浦和パルコ9階、 ロイヤルバインズ ホテル浦和	実行委 員会	事業部
水明夏行	7月29日(金) ～31日(日)	6月・7月号	浦和パルコ10階	事業部	
りんどう忌	9月26日(月) (予定)	7月・8月・ 9月号	浦和パルコ10階	事業部	
水明塾	10月29日(土) (予定)	8月・9月・ 10月号	浦和パルコ10階	事業部	

(注) 予定表の詳細未定については、月日・会場を変更することがあります。
本行事予定表にない日帰り吟行会、吟行旅行などについては個別に対応。
※「水明忌」は如月忌、紗一忌、光二忌を統合した忌日。

令和4年主な兼題句等募集について

令和4年1月1日

募集行事名	誌上案内	応募用紙等	応募締切日	備考	主幹
「水明1100号」 記念句	2月・3月号	2月号	3月25日	「水」「明」の詠込	編集部
全国大会	3月・4月 ・5月号	3月・4月 ・5月号	5月10日		編集部
「第17水明抄」	6月・7月号	6月号	7月25日	「第16水明抄」以 降の作品から20 句	編集部

水明例会および各地句会・教室のご案内

(令和4年1月1日)

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
第一例会	第1日曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 048-886-1860 境延昭 048-686-2281
第二例会	第3金曜 13時	本所ビッグシップ (東京・本所)	網野月を	山中みどり 03-3625-2435 太田絹映 03-3819-6730
第三例会	第1月曜 13時	京橋区民会館 (東京・京橋)	山本鬼之介	五明昇 048-858-7155 曲淵徹雄 048-864-4018
第四例会	第1木曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	椎野美代子	境延昭 048-686-2281 石井喜恵 048-683-0801
第五例会	第3火曜 13時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 0480-22-4011 河野はるみ 090-9008-6422
若松例会	第1土曜 13時	京橋区民館 (東京・京橋)	山本鬼之介	正木萬蝶 045-491-8773 石田慶子 03-3853-2048
関西例会	第3日曜 13時	守口文化(セ) (大阪・守口)	大橋廻代	森本早苗 078-583-6225
水明鬼石句会	第3水曜 13時30分	藤岡市鬼石公民館 (群馬・鬼石)	野口和子	野口和子 0274-52-3418
水明小川 俳句に親しむ会	第1月曜 13時	大塚コミュニティ(セ) (埼玉・小川)	森千代子	越田栄子 048-525-5835
水明熊谷句会	第4火曜 13時	熊谷市立 コミュニティー(セ)	山本鬼之介	大塚茂子 048-596-1538 越田栄子 048-525-5835
雛の会	第2木曜 13時	水明発行所	石山かつ子	梅澤佐江 0480-22-4011
櫻蔭句会	第2水曜 9時30分	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	丸山マスマ	阿部幸代 048-974-1704
桜林句会	第1金曜 13時	大宮生涯学習(セ) (さいたま・大宮)	椎野美代子	山田美佐尾 048-861-3968
野菊の会	第2水曜 13時	下落合公民館 (さいたま・中央区)	椎野美代子	茂木和子 048-886-1860 下川光子 048-857-2120
芽吹句会	第3金曜 13時30分	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	日高道を 048-886-8173

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
柿の木塾	第3金曜 13時	水明発行所	勉強会	茂木和子 048-886-1860
歩の会	第1金曜 12時	水明発行所	勉強会	茂木和子 048-886-1860
りそな俳句会	第2火曜 18時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	星野和葉	高島寛治 048-782-8809
山茶花	第1水曜 10時	本太公民館 (さいたま・浦和区)	星野和葉	小川清一 048-887-6956
櫟の会	第3水曜 13時	常盤公民館 (さいたま・浦和区)	星野和葉	柚木治子 048-831-6158
珊瑚の会	第4木曜 13時	水明発行所	研究会	大村節代 048-862-9658
芙蓉句会	第3金曜 9時30分	六辻公民館 (さいたま・南区)	山本鬼之介	山戸美子 048-677-8775
かわせみ句会	第2火曜 13時30分	南浦和公民館 (さいたま・南区)	勉強会	福田育子 048-882-1045
花衣の会	第3水曜 13時	土合公民館 (さいたま・桜区)	大村節代	田中章嘉 048-862-5936
たかなな 俳句会	第3木曜 13時	芝二丁目集会所 (埼玉・川口)	山本鬼之介	野田静香 048-261-1858 青木鶴城 048-829-2776
きざき サークル	第3水曜 14時	木崎自治会館 (さいたま・浦和区)	松本光子	森和子 048-832-6565
ひまわり句会	第1木曜 10時	草加アコスビル (埼玉・草加)	勉強会	小倉倭子 048-925-8080 石田慶子 03-3853-2048
花ごよみ句会	第3月曜 13時	さいたま市民活動 サポートセンター (パルコ・9F)	星野和葉	山下ユリ子 048-861-6685
野ばらの会	第2水曜 13時	さいたま市民活動 サポートセンター (パルコ・9F)	星野和葉	緒方みき子 048-881-8643
皐月の会	第2金曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	渋谷さいち 048-832-5319
青葉の会	第3月曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	梅澤輝翠 090-9825-3415
新樹の会	第4月曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	青木鶴城 048-829-2776
鶴川山百 合句会	第4火曜 13時	玉川学園文化(セ) (東京・町田)	町野広子	鈴木玲子 044-952-3643

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
ミモザの会	第2火曜 13時	アートフォーラム あぞみ野(横浜)	勉強会	福田千春 045-901-6032
水明松本句会	第4週末	波多野寿子宅 (長野・松本)	波多野寿子	波多野寿子 0263-47-8937
若狭水明会	毎月20日	鳥羽公民館 (福井・若狭)	宇田白鷺	鳥羽和風 0770-64-1211 鳥津初花 0770-64-1626
水明滯つ くし句会	第2土曜 13時	守口文化(セ) (大阪・守口)	由良ゆら女	由良ゆら女 06-6933-0689
和歌山水 明句会	第2木曜 13時	太田自治会館	大橋迪代	大橋迪代 073-471-5582 西浦千枝子 073-471-7929
神戸大池句会	第2火曜 13時	神戸市勤労会館 (神戸・中央区)	勉強会	田寺玲子 078-914-0341 森本早苗 078-583-6225
光が丘俳句会	第3火曜 13時	光が丘区民(セ) (東京・練馬)	勉強会	石川理恵 03-3938-0208 水落守伊 03-3970-2723
りんどう 俳句会	第2木曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	高島寛治 048-782-8809 大場順子 048-647-5157
俳句の手ほどき 岩槻教室	第1・3水曜 13時	岩槻駅東口 コミセン	山本鬼之介	石山かつ子 048-757-2484
コクーンシテイ カルチャー 俳句教室	第2・4金曜 13時30分	コクーンシテイ カルチャー (さいたま新都心)	境延昭	五明昇 048-858-7155 井口俊晴 048-824-2024
あゆみの会	第2・4木曜 13時	下与野 コミュニティ(セ)	境延昭	鈴木藻好 048-825-0158
蝌蚪の会	第3月曜 13時	イートピア与野 集会所	網野月を	岡田宣子 048-825-6502 青木鶴城 048-829-2776
円卓の会	第3土曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	網野月を	青木鶴城 048-829-2776
繭の会	第1月曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	網野月を	小林京子 048-865-8158 青木鶴城 048-829-2776
若鮎句会	第2土曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	網野月を	持永喜夫 048-825-7605 青木鶴城 048-829-2776
めだか句会	第4土曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	網野月を	青木鶴城 048-829-2776

後記

明けましておめでとう

いびきます

水明の表紙は、季音同人の内田恵子氏の油絵です。表紙絵は一月号と七月号の年二回変わります。お気づきでしょうか。今年は一月号に相応しい「梟」の絵です。ふくろうは「福来朗」「不苦勞」とも表記し冬の季語です。そして日本では「森の物知り博士」「森の哲学者」と言われ吉鳥とされています。またヨーロッパでは知恵と武勇の象徴とされているそうです。この吉鳥巢にあやかつて、今年こそ、新型コロナウィルスが終息するようにと思いますが……。

昨年(2020年)の十二月に、コロナで延期されていた夏行「菊風句会」の名で行なわれました。夏行は恒例として、主宰に高得点を頂いた方が、句会の報告を書く事になっています。今回は、一日目は石山かつ子氏、二日目は青木鶴城氏が一

位でしたので、今月号で記事を書いて下さいました。

先日、丸山マスマ氏が金色の綺麗な桶をお持ちになりました。金ピカのキレイな桶は、一センチ位の厚さで、立て掛けられ、マスマ氏の句が書かれています。「第一〇五回千代女全国俳句大会」の兼題の部に応募なさつて、朝顔賞(岳主宰宮坂静生選)を頂いたそうです。

手首なき湖北の仏弊辛夷

丸山マスマ

朝顔に釣瓶とられてもらひ水の加賀千代女の名を冠した大会なので「千代女賞」「朝顔賞」「つるべ賞」の三賞のようです。

会員の皆様も機会がありましたら、外部へも投句をなさつたら良いと思います。私もさぼらないで努力しなくてはですね。

最後に皆様へお願いです。「季音雪月花」の投句用紙が巻末に付きました。「水明集」の方「季音」の方、どうぞお間違えのない様にお書き下さいませ。よろしくお願ひします。

(節代)

今月のはてな?

御舟(ぎよしゅう) 速水御舟

鵜(ひたき)

蝦蛄(しゃこ)

杜父魚(かくぶつ)

破声(われごえ)

野阜(のづかさ)

齋(もたら)す

枯露柿(ころがき)

薯蓣(やまいも)

編席(あむしろ)

7 10 19 20 37 44 50 70 頁

水明発行所受付時間

曜日：(月・水・金)

時間：12時半～午後4時半
(火・木・土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、
ご用の方は 時間内をお願いします。)

水明

令和四年一月号

通巻一〇九六号

令和四年一月一日発行

発行人

山本 鬼之介

〒330-0073

さいたま市浦和区元町一丁目一八

電話

048-886-1600三

発行所

水明俳句会

〒330-0064

さいたま市浦和区摩町四丁目二二

電話

048-822-4741

誌代

半年分 六、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替

〇〇一七〇〇〇一五三三九三

印刷所

中央美版

季音 雪月花

三月号 一月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏名(俳号)

題

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明集

四月号 一月二十五日締切

最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

Table with 6 columns and 16 rows for handwritten entries.

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作つて使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

都市又は府県名

氏名(俳号)

氏名

住所

年齢

山紫集

四月号 一月二十五日締切

氏名(俳号)

一月の兼題 「初春」 (傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を

使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って

使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所

氏名

年齢

季音抄

山本鬼之介

待ち人の靴音がす冬館
空中に影斬り結ぶ木の葉雨
深爪を後悔してゐる冬隣
夜を来て苦屋にほどく露の髪
枯葉舞ひ鳥屋の孔雀が昂りぬ
鳩尾に諫言の悔い木守柿
ちちろ鳴く吾が耳鳴りは鈴の音
本尊の螺髪をたたく煤払
狛犬の立ちて見送る神の旅
盆景に溪の声聴く菊日和
いち枚の音降らしめ寒の剪定師
落鮎や尖り初めたる峡の風
華やぎを残す秋蝶如何にせむ
後の月島の駐在警邏中
天光をあつめはなやぐ冬紅葉
AIを負かす若者文化の日
ゆくりなく時雨に出会ふ渡月橋
文机の木目にまぎれ木の葉髪

由良ゆら女
吉住光弥
網野月を
石井喜恵
石山かつ子
大橋廸代
丸山マシミ
鳥羽和風
高島寛治
森本早苗
渡辺舍人
荒井俱子
正木萬蝶
近藤徹平
佐々木典子
大塚茂子
井上玲子
石川理恵

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

翠巒や静寂を破る鴝の声
一切が霧遠ざかる櫂の音
刈田道沈む夕日に合掌す
後の月酒杯に満つる夜の気配
京に嫁し友京訛り古都初秋
林檎放る妻の直球受けそこね
お裾分けと策に松茸江戸氣質
たたなづく夕映えの山秋深し
霧の村忠治を慕ふ民いまも
千枚の刈田の先に日本海
芋虫の漆黒に目を奪はるる
蕨戸を締むる僧侶や秋深し
レモン嚙れば煩惱ひとつ消ゆるかな
天高し引く手数多の角隠し
秋思濃き男の像の瞑目よ
ふと胸をよぎる余生よ十三夜
友垣と遊びし古墳草紅葉
樟脳の香りほのかに秋深し

反町 修
横山 君夫
笹本 啓子
元田 亮一
本橋 稀香
曲淵 徹雄
保坂 翔太
西幅 公子
染谷 正信
渋谷 さいち
丸屋 詠子
鈴木 和子
新 曆文
梅澤 輝翠
橋本 京子
越田 栄子
村杉 清吉
原田 秀子

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木 和子 境 延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野 月を	山田 みどり 太田 絹映
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五曲 明昇 淵 徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	椎野美代子	境石 延昭 井 喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤 佐江 河野 はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木 萬蝶 石田 慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋 勉代	森本 早苗

水 明

令和四年一月一日発行 毎月一日発行

(第九十五卷 第一号)

定価 一〇〇〇円